『消えない虹』

佐倉尚紀

あらすじ

「あなたのとっておきの人に
あなたの想いを
タイムカプセルにして
贈ってみませんか
それぞれのコースでは
光り輝く宝石をご用意しました
・　五年サファイヤコース
・　七年エメラルドコース
・　十年ダイヤモンドコース
お好きなコースをお選びください」

こんな呼びかけで、二十一世紀新事業として郵便局が始めた「タイムカプセル便付き定期貯金」

明日美は十年コースを選ぶことにした。

話は明日美の少女時代へとタイムスリップ。時代は昭和四十年代後半、小学校一年生の明日美は数年後、自身の苦い体験のきっかけとなる捨て犬・桃子を飼うことになった。だが、タケばあちゃんは、犬が大嫌いだった。明日美はお父さんとの約束を守り、桃子と散歩を続けていた。その後、山好きなおじいちゃんが山で亡くなったり、桃子がいつの間にか母親になったり、明日美の周辺にもいくつかの出来事が起こる。

明日美が五年生の頃、あることがきっかけとなり、タケばあちゃんとの間に気持ちの隙間が出来た。イライラが嵩じた明日美は、「おばあちゃんなんか死んでしまえ！」と悪態をついたことさえも。大のおばあちゃんっ子だった明日美は、どんどんタケばあちゃんが嫌いになっていった。そして中学生・高校生になっても明日美は、その心をかたくなに閉ざしたままであった。その後、大学に進学した明日美は、屈折した心を胸に故郷を後にした。

時計の針を現在にひき戻す。

明日美の家庭は、夫と中一の息子、小四の娘それに義母の五人暮らし。平凡ながら幸せな日々を過ごしていた。

ところが、義母の健康問題や娘が犬を飼いたいと言い出したことなど、明日美が小学生の頃とよく似た状況に、あらためてほろ苦い思い出をかみしめる。

そして、将来、小学校の先生になるのが夢と語っていた二人の子供のために、この「タイムカプセル便」を纏め上げた。

人それぞれに思い出がある。

タケばあちゃんにも・・・それは、忘れたくても忘れられない、消したくても消せない深い思いの証しだった。

未来時間の多い者と過去時間の多い者

との心のすれ違い。明日美とタケばあちゃんを中心とした周辺模様を通して、命の喪失と誕生、その悲しみと驚き。人の心の痛みを受信することの難しさ。人は過去の思い出をどう受けとめるか、明日美の頑なな心を開かせるものは何か？明日美の〃心のふるさと〃とは。

そして、十年後、七夕の日に届いたタイムカプセル便。これを手にした時、明日美は・・・二人の子供は・・・

《明日美の系譜》

河原家

＊英おじいちゃん（明日美の祖父）
＊タケばあちゃん（明日美の祖母）
＊お父さん・康次郎（明日美の父）
＊お母さん・清美　（明日美の母）
＊お兄ちゃん　　（明日美の兄）
＊明日美　　（あすみ本人）
＊桃子（愛犬）

杉山家

＊おじいちゃん（夫の父）
＊鈴おばあちゃん（夫の母）
＊夫　　（明日美の夫）
＊明日美（あすみ本人）結婚して杉山姓に
＊長男・透
＊長女・綾子
＊ポテト（愛犬）

『消えない虹』

もくじ

・序章　　ママのタイムカプセル
・カプセル一　桃子
・カプセル二　おじいちゃんが山へ
・カプセル三　五つの命
・カプセル四　散歩道
・カプセル五　びしょ濡れて
・カプセル六　ワイパー
・カプセル七　タケばあちゃんの背中
・カプセル八　犬嫌い
・カプセル九　桃子が
・カプセル十　やすらぎの風景
・カプセル十一　ふたたびの
・カプセル十二　虹のごとし
・終章　　七夕の日に

序章

「あなたのとっておきの人に
あなたの想いを
タイムカプセルにして
贈ってみませんか
それぞれのコースでは
光り輝く宝石をご用意しました・・・
・五年サファイヤコース
・七年エメラルドコース
・十年ダイヤモンドコース
どうぞお好きなコースをお選びください」

こんな呼びかけで、二十一世紀新事業として郵便局が始めた「タイムカプセル便付き定期貯金」タイムカプセル便として綴ったメッセージは、希望の未来年月日に配達されます。

これは郵便局の二十一世紀新事業として、それぞれの思い出づくりに貢献しよう、との願いから「タイムカプセル便付き定期貯金」を取り扱う窓口が、全ての局に設置されたものです。

一般向けと家族向けとがあり、家族向けは、三つのコースに限定されていました。

以前は、万博など何か特別なイベント時に記念として行われていましたが、今年から常時受付可能となりました。利用者は、窓口にある所定の依頼書に必要事項を記載し、封筒に入れて提出するだけなのです。明日美は今回初めてダイヤモンドコースを利用してみることにしました。十年後の七夕の日を指定して。

〈ママのタイムカプセル〉

透君、あなたはいま中学一年生です。中学生になって心も身体もメキメキと成長してきたように思います。すでに背はママを超えてしまいましたね。顔つきや話の仕方がパパとそっくりに感じることがあり、親子だなって感心したりビックリしたり。

綾ちゃん、あなたはいま小学四年生。あんなに小さい身体と小さな手でママにしっかりと抱かれていた頃が懐かしく思い出されます。病気もしないで元気に育ってくれましたね。健康は最高の親孝行ですよ。

二人とも将来何になりたい？　って聞

いたら、小学校の先生になることが夢だって言ってたわね。いまママは、そんなあなた達にタイムカプセルをプレゼントしようと、文章を作成しています。人はそれぞれ思い出を抱いて大きくなっていきます。嬉しいこと、楽しいこと、面白いこと、辛いこと、悲しいこと、苦しいこと色んなことが、あなた達を成長させてくれる栄養分です。これからも今のあなた達の素直な気持ちを忘れずに成長していってくださいね。

七夕の日は、織姫と彦星が年に一度会う日ですよね。それより十倍も長い十年目にこの文章に出てくるママとあなた達の出会い、ママもこんなことを経験していたんだ、こんな風に考えていたんだなぁって見てもらいたいのです。また、ママの小さい頃の家族のことも知って欲しいのです。あなた達がこれをながめてどんな顔をするか、そしてどんな会話をしているか、それを思うとママはとても愉快な気持ちになってきます。ママのこの風変わりなプレゼント「言葉のアルバム」をどうぞお受け取りください。そして一緒に家族の最近の写真や二人が学校で作った図画や習字・作文なども同封しておきます。

十年後の七夕の日、透君は大学を卒業して先生になっているのかな、そして綾ちゃんは、大学生か。このプレゼントが透先生？　や綾ちゃんの参考になってくれると嬉しいなあ。二人がどんな大人になっているか楽しみです。

最後になりました、パパにも見てもらいたいものを入れておきますよ。

十年後、私の歳もバレちゃうから、あまり大きな声では言いたくないけれど、パパは四十八歳、これからも元気で頑張ってくださいね。そしてみんなで、鈴江おばあちゃんを支えていきましょうね。

二〇〇X年七月七日

七夕の日に

ママ・杉山明日美より

・　・

二〇〇X年七月六日　午後三時過ぎ・・・

「ママ、ただいま！」

「お帰りなさい。綾ちゃん」

「鈴おばあちゃんママは？」

「お部屋じゃないの？」

小学生の綾子が笹竹(ささだけ)に短冊(たんざく)を吊るして帰ってきました。

「なんだ、ここに居たのか。ママ、起きて！」

明日美は机から顔をあげ

「あれ、綾ちゃん帰っていたの」

眠そうな顔をしながら、思いっきり両手を上げ背伸びをした目に、七夕の飾りがキラキラと光るのが見えました。

「まぁ、すごーい。きれいな短冊。そうか、明日の七夕用ね」

「何してたの？　ママも短冊に願い事を書いて頂戴」

「ママねぇ、いいことしてたんだ。あなた達にねプレゼントをしようと思って。ちょうど今終わったところなの。願い事もたくさん書いたわよ」

「へぇー、なーに？」

「それはねぇ　〃　な・い・しょ　〃　」

窓の外は梅雨の曇り空に覆われていました。きっと明日も天の川は雲の上。でも織姫と彦星が忍び逢うにはうってつけの夜になりそうです。

……

この頃、明日美は専業主婦として公務員の夫と二人の子供、義母(ぎぼ)鈴江それに愛犬の五人一匹と共に、ささやかだが充実した日々を過ごしていた。郵便局の新事業「タイムカプセル便付き定期貯金」の「タイムカプセル便」に興味を抱いた明日美は、中一の長男・透、小四の長女・綾子が共に将来小学校の先生になると夢を語っていたことで、そんな子供たちへメッセージを贈ろうと、明日美の幼稚園時代から現在にかけての家族風景を思い出しながら、物語風に文章を起こしていた。その中に、明日美はどうしても、とうに亡くなった故郷のタケばあちゃんのことを、そして仔犬「桃子」について触れないわけにはいかないのだった。それにはある複雑な思いが絡んでいた。

タイムカプセル便はこの「桃子」との出逢いから始まっていた。

……

カプセル　一

桃子

・・・・時計の針を逆回りにして、昭和四十年代後半、小学生のママにちょっとタイムスリップしてみましょう。物語

は、仔犬「桃子」との出会いから始まります。それはママが小学校一年生になって間もない頃のことでした。子供の頃のママの家、そう河原家は、お父さん、お母さん、お兄ちゃん、そして英おじいちゃんとタケばあちゃんの六人家族でした。そんな家族に桃子が加わったのです。桃子との出逢いは、数年後の、ママの苦い体験のきっかけでもありましたが、その時、そんなことになろうとは、全く知る由もありませんでした。

桃子は明日美が一年生になった五月、校庭の生垣(いけがき)の下、ダンボール箱の中に捨てられていました。その小さなダンボール箱から小さな茶毛の仔犬が顔を覗(のぞ)かせてクンクン、キャンキャン泣いているのです。登校する子供たちみんなが立ち止まって、わーわー言いながら仔犬の頭をなでたり、抱っこしたり、でも当然ですが誰も仔犬をどうすることも出来ません。明日美も抱っこしてみたら口元からプーンとミルクのような臭いがしてきました。教室に入ってもみんな仔犬の話でもちきりでした。明日美は授業時間中も仔犬が気になり先生の話なんかなんにも耳に入りませんでした。授業が終わると急いで由紀(ゆき)ちゃんと香里(かおり)ちゃんを誘って一番最初に校門を飛び出しました。

仔犬のダンボール箱は空でした。

「いなくなっちゃった」

「どうしたのかな？」

「だれかが拾っていったんじゃないの？」

と話している三人の耳に、クンクン泣くか細い声が聞こえてきました。仔犬は朝いた場所から少し離れた、赤い花を沢山つけたつつじの木陰(こかげ)でうずくまっていたのです。明日美たちが近づくと尻尾(しっぽ)を振りながらチョコチョコと走り寄ってきました。香里ちゃんが手を出すとペロペロとなめるのです。

「お腹(なか)が空(す)いているんだよ、きっと」

「水飲まないと死んじゃうよ」

「そうねぇ、このままほっといたら死んじゃうかもね」

頭の中でその姿を連想してしまいました。

「どうしよう？」

「給食の残りを持ってくればよかった」

「明日美ちゃん連れて帰ったら？」

「うん・・・でも・・・」

「由紀ちゃんと香里ちゃんはどうな

の？」
「ダメよ、うちのアパートは動物が飼えないって、お母さんが言ってたわ」
由紀ちゃんがちょっと残念そうな顔をしました。
「私の家では飼ったことがあるんだけど、その子が死んじゃったらもう動物はいいって、お母さんが・・・」
香里ちゃんも、ほんとは連れて帰りたい様子です。
「ちょっと待って、私、学校から水を持ってくるから」
明日美は走って校門に駆け込んで行きました。
「ちょうどいいのがあったわよ」
間もなく、明日美は手洗い用の小さな洗面器に水を入れて戻って来ました。
「わぁ、そんな大きな物を・・・」
仔犬の水呑にしては確かに大きかったのですが、他に代わるものが見つからなかったのです。仔犬の前に置くと余程のどが渇(かわ)いていたのでしょう、洗面器の中に落ちそうになりながらも必死に口をつけピチャピチャと美味しそうに飲んでいました。三人はここで随分道草をしてしまいましたが、結局、明日美が家に連れて帰ることになりました。最初から、内心連れていきたいと思っていたのです。
「お母さん、良いよって言ってくれるかなあ」
仔犬の耳に、何回となくそっとささやきました。仔犬も不安なのか道々クンクン泣いてばかりでした。
家に着くなりランドセルを背負ったまま、抱っこした仔犬をタケばあちゃんに見せました。
「あれまぁ、どうしたの、この犬？」
生来の元気な声をさらに大きくして、仔犬の顔を覗き込みました。
「飼っても良いと思う？」
「・・・おばあちゃんは、犬は可愛いけどあんまり好きじゃないし・・・」
日頃のハッキリした口調が、少し戸惑いがちになっていました。可愛いけど好きじゃないってどういうことなのか、明日美にはタケばあちゃんの気持ちがさっぱり分かりませんでした。
「生きものは世話が大変よ。お母さんに相談しなさい」
と言われ、明日美はお母さんが帰るのを待つことにしました。後で分かったことですが、この仔犬は生後二ヶ月くらいの女の子で柴犬(しばいぬけい)系の雑種でした。
夕方、お母さんが仕事を終えて帰って

きました。
「ねぇお母さん、ほら見て！」
早速、抱いた仔犬を、お母さんに背中を向けながら、くるりと半回転して仔犬を差し出して見せました。
「わー、なあにこの犬、一体どうしたのよ」
お母さんはびっくりしていたけれど、「可愛いねえ」と桃子を抱き上げ頬ずりしていました。
「ねぇ、飼ってもいいでしょう？」
お母さんの様子で、これなら大丈夫と思いすかさず明日美は言ったのです。
「ダメ」
すぐ返事が返ってきました。
「お母さんはお仕事があるし、おじいちゃんやタケばあちゃんには負担は掛けられないし・・・やはり無理よ、うちでは。ダメダメ！」
「私が面倒見るもん、だからいいでしょう？」
「口で言うほど簡単じゃないのよ、ダメだよ」
「あぁー」とため息をついてうなだれるのと一緒に、桃子がタイミング合わせたみたいに「フーッ」と弱い声を出して、これまた頭を垂れたのです。その仕草にお母さんの顔から笑みがこぼれました。
「じゃー、お父さんが帰ってきたら相談するから、それからにしようよ」
お母さんはもともと犬は大好きで、子供のころは家で飼っていたんだと聞いたことがありました。でも好きなのと飼うこととは別で、毎日欠かさず世話をやれるだろうかそれがお母さんには気がかりだったのです。
お父さんが帰ってきました。
「明日美、お前ちゃんと世話が出来るのか？」
「大丈夫よ、絶対きちんと世話をするから、ねえ、いいでしょう？　お願い！」
「よし、それならお父さんの言うことを紙に書きなさい。そしてちゃんと約束できたら飼ってもいいぞ」
〃雨の日も風の日も雪の日も朝晩きちんと世話をします〃とお父さんが言いました。それを明日美は半紙に、たどたどしい文字で書きました。
〃　あめのひも　かぜのひも　ゆきのひも　　あさばん　きちんと　せわをします　　あすみ　〃
おじいちゃんも帰ってくるなり、家の中の雰囲気が少し違っていることにすぐ気付いたようでした。仔犬を見つけると、

「ホウー」と言いながら抱き寄せ頭をなでていました。しかしなぜかタケばあちゃんの顔を見て黙ってしまいました。

「早く名前をつけてあげなさい」

お母さんに言われ、たぶん三月頃に生まれたのだろうということで名前は〝桃子〟とつけました。

こうして、我が家は、お父さん・お母さん・お兄ちゃん・おじいちゃん・タケばあちゃん・桃子そして明日美の六人一匹の生活が始まったのです。犬との同居は初めての体験でした。小さな歯でところかまわず噛み付いてきたりオシッコをもらしたり、そのたびに家中大騒ぎです。肝心の世話はというと、餌を与えるのはともかくも、一番の問題は散歩です。頃合を見計らい散歩を始めようとしましたが、お母さんは朝夕食事の準備で散歩は出来ません。それにお勤めもあります。お兄ちゃんは、部活があるからと、あまり乗り気ではありません。もちろん、タケばあちゃんは犬が嫌いなので散歩をお願いするのは無理です。朝晩と約束したものの、朝はお父さんが健康のために担当することとし、忙しいときだけ、おじいちゃんが助けてくれることになりました。でもだんだんと朝はおじいちゃんの仕事になってしまうのでした。おじいちゃんは暇って言えば暇なんでしょうが、山が好きでしょっちゅう出かけていたのです。でも、桃子のことはとても可愛がってくれました。おじいちゃんにも散歩を手伝ってもらいながら、明日美は約束の半分の責任はしっかりと果たしていました。

車庫の中にプラスチック製の小屋を置きました。不思議に桃子は自己主張の少ない子で、餌の時間になってもこちらが準備するのを待って初めて動き出し、自分からは殆ど催促はしないのです。

「桃子は野良の経験があるから遠慮しているんだろう」

そう思うといじらしくなって来ました。

散歩のときは、車庫の扉をガタガタと開けた音を聞いてから、頭を出し背伸びをして小屋から出てくるのでした。あたかも「しょうがない散歩についていってやるか」ってな感じです。でもさすが散歩中はとても嬉しそうにあっちへいってはクンクンこっちにきてはクンクン。引き綱の長さ目一杯動き回っていました。

ある時、田んぼ道の草むらで、桃子が跳ねては地面を掘ってと何回も同じ動作を続けていました。どうしたのかと覗いてみると、そこにいたのは、なんとモグラ

の子供です。まだ目が開いておらず、青い幕が張ったように見えました。大きさは五センチくらいでしょうか、毛も生えていない様子で全身ピンク色をしています。その時です。いきなり桃子が口に咥(くわ)えたのです。一瞬食べちゃうと嫌(いや)な予感がしました。

「桃子、やめて！」

モグラの哀れな姿が目に浮かび、思わず叫んでしまいました。でも桃子は決して食べるつもりではなく、柔らかく口で抱いてといった方がいいでしょうか、母性本能とでも言うべきなのでしょうか、とにかく優しくいたわるような行動をとったのでした。

野良でも桃子はとっても優しい犬なのでした。

そんな愛すべき桃子に、タケばあちゃんだけは積極的に近寄ろうともしないのです。しかし、明日美が桃子と遊んでいると、離れたところからタケばあちゃんがこっちを見ているのが分かりました。

カプセル　二

おじいちゃんが山へ

・・・・・桃子の散歩も喜んでやっていたおじいちゃん。山が大好きだったおじいちゃんが、山で六八歳の生涯を閉じたのです。若い頃おじいちゃんと山で出逢い結ばれたタケばあちゃんに、その死が与えた影響はとても大きいものでした。

明治生まれのおじいちゃんとタケばあちゃんは、昔のことでしたから高等小学校を終えるとすぐに東京へ働きに出ました。おじいちゃんは最初、工場に住み込みで働きながら、夜は夜学に通っていました。長身で色白の細身のため、一見ひ弱な感じに見られましたが後に山登りが趣味になったように、友人達と四十キロ夜間行進もこなすほど、元来強靭(きょうじん)な体躯(たいく)の人でした。明治末期に生まれ、おじいちゃんより五歳年下のタケばあちゃんは、ある商店に、その家の子守りを兼ねて住み込みで働いていました。そこの奥さんに実の娘のように可愛がられ和裁(わさい)の専門学校にも通わせてもらったそうです。ふっくらとした面立ち（おもだち）とまん丸の黒い大きな瞳が印象的でその目が常に微笑を浮かべているように見え、みんなからタケちゃん、タケちゃんと親

しまれていました。毎朝、はきはきとした大きな声で相手が応えようがどうしようが、「おはよう」と声をかけテキパキと掃除を始めるのです。「五尺の大女」と呼ばれたほどですから当時としては大柄だったのでしょう。

タケばあちゃんがおじいちゃんと出会ったのが、足柄山の金太郎さんのおとぎ話で有名な金時山でした。おじいちゃんが青年団のグループで山登りをしたとき、偶然タケばあちゃんが他のグループに居たのです。そのころ女の人で山登りに行く人はほとんどおらず、そのせいかタケばあちゃんは男のような格好で山に行ってたそうです。タケばあちゃんは、よほどお転婆だったのかも知れません。両グループの休憩場所が一緒になり、どこから来たのかとか、これからどっちに向かうのかなど他愛も無い話からはじまり、雄大な富士山の素晴らしさなどを語り合ったのが出会いの最初だったそうです。その後もグループ登山を何回か重ねました。タケばあちゃんはおじいちゃんの少し頑固なところがありましたが素朴な優しさに惹かれたと聞きました。おじいちゃんが無口なかわりに、タケばあちゃんはよく喋りました。話し好きだったのです。おじいちゃんはそんなタケばあちゃんが大好きだったんだと思います。昔は恋愛結婚はかなり珍しいことでしたが、郷里が同じだったことが幸いし二人は結ばれたのでした。

その後仕事は変わりましたが、おじいちゃんとタケばあちゃんは、第二次世界大戦の終戦の年、昭和二十年（一九四五年）の東京大空襲で焼け出され、命からがら二人の郷里である今住んでいるこの町まで逃げ延びてきたと、お父さんから聞かされたことがありました。

おじいちゃんは毎年春になると、山菜採りで朝早くから出かけていました。

明日美が小学校三年生の時です。

「おじいちゃん、どこへいくの？」

珍しく朝早く目が覚めた明日美は、おじいちゃんを見つけ声をかけました。

「明日美、なんだもう起きたのか。おじいちゃんな、これから山菜取りに行ってくるから。今日は、おばあちゃんの変わりに桃子を連れて行くよ」

ひげ面の顔で、にっこり笑いながらおじいちゃんは自転車にまたがりました。

何気ない朝のひとコマ。これがおじいちゃんとの最後の会話になろうとは。

いつもはタケばあちゃんも一緒なのですが、その日にかぎっておじいちゃんは一人で出かけたのです。明日美は桃子のウキウキとしたような足どりと、自転車にまたがったおじいちゃんの後ろ姿をじっと見つめていました。

行き先は毎年同じ山で、途中までは自転車で行き、そのあと歩いて奥深く入って行くのでした。一時間もすれば持参したリュックが一杯になってしまうのです。山菜採りの常連の話を総合すると、帰り道、採った山菜を背中に背負い、片手に桃子の引き綱を握って自転車で山道を下っているとき事故が起きたのだそうです。どうしたはずみかスピードが出すぎハンドル操作を誤って倒れ、路肩（ろかた）のブロックに全身を強打してしまったということでした。通りがかった他の山菜採りの人が呼んでくれた救急車で、すぐ病院へ運ばれていきました。自転車の登録ナンバーから我が家に電話が掛かってきたのが一時間後くらい。タケばあちゃんは、「桃子なんか連れて行くから」と、すっかり気が動転して左右違った草履（ぞうり）を履いてお父さんの自動車に乗ってしまったほどでした。

明日美も先生から「おじいちゃんが入院なさったから」と話があり、用務員さんの車で病院へ向かいました。ベッドでは手当てを終えたおじいちゃんが、頭や腕に真っ白な包帯を巻かれ眠っており、その脇（わき）でタケばあちゃんが、包帯から出ている指を包み込むように両手で柔らかく握っていました。お父さんも、お母さんもそしてお兄ちゃんもベッドのおじいちゃんの寝顔をじっと見つめていました。

タケばあちゃんは、おじいちゃんに付きっきりでした。

お母さんが、「私がやるから身体を休めて」と何度も言いましたが、タケばあちゃんは頑（がん）として聞きません。結局おじいちゃんは、タケばあちゃんに看取（みと）られながら、最後に何か言うような聞き取れない言葉を発し、入院三日後に亡くなってしまったのです。お葬式の時、タケばあちゃんは疲れ果て放心したようにポツンと言いました。

「おじいちゃんは、私を置いて一人で山へ戻って行った・・・」

もうタケばあちゃんの目から涙も出なくなっていました。

カプセル　三

五つの命

・・・・・ママが三年生の冬の夜、あんな小さかった桃子がなんと母親になりました。おじいちゃんの命が消えて一年もたたないうちに、新たな命が誕生したのです。

桃子が来て二年半ほど経ったある秋の午後、突然、キャイーンと今まで聞いたこともない桃子の声と暴れるような音がしました。明日美が小屋へ飛んでいくと、桃子の背中に黒い縮(ちぢ)れ毛の犬が覆(おお)い被(かぶ)さっているのです。喧嘩(けんか)していると思って、それをどう停めようかと迷ったあげく、おばあちゃんを呼びました。

「あーあ、この不良犬が！」

タケばあちゃんが、バケツの水を思いっきりかけると、その犬はまもなく何処かへ走り去っていきました。そう云えばあの犬はここ数日間この近くをウロウロしていたのでした。首輪が無いところを見ると捨て犬だろうとお父さんとも話していたのです。

その後、明日美は異変に気がつきました。

「お母さん、桃子お腹が大きくなったよ、病気かなぁ」

「赤ちゃんが出来たのかも知れないねぇ」

「ええっ！　赤ちゃんが。ほんとに？」

「冬になるでしょう。生まれるのは」

まだ先の話なのに、明日美は毎日、まだかまだかとその日が来るのを待ち焦がれていました。

ある冬の夜のことでした。

「オーイ、生まれているぞ！」

お父さんの慌(あわ)てたように叫ぶ声がしました。

「生まれた？　ほんとに」

明日美とお母さんが見に行くと

「一匹だ！」とお父さんの声。

「意外だねぇ、一匹とは・・・」お母さんが驚いたように言いました。

桃子の小屋で、小さくかすかな泣き声がしていました。

明日美も、「何だ、たった一匹か」とがっかりしながら覗き込むと、びしょ濡(ぬ)れの赤ちゃんがいたのです。誰も犬の誕生に立ち会った経験がありません。ただ右往左往(うおうさおう)するばかりです。その時、意外にも一番しっかりしていたのが、タケば

あちゃんでした。
「心配しなくていいよ。犬はキチンと育てるから。誰も教えないのに偉いもんだよ」
その通り、桃子は赤ちゃんの身体をせっせとなめて綺麗(きれい)にしていました。その目は、もうすでに母親の目でした。驚きは翌朝も続きました。
「五つも居るぞ！」
お父さんのまたまた驚きの声です。
なんと一匹と思っていた小屋の中は、全部で五匹になっていました。五つの命の誕生です。桃子のやつれたような顔が印象的でした。誰からも教わったわけではないのに、桃子はキチンと出産を終え、そして育児(いくじ)と取り組んでいるのでした。

命の卵から　小さな命が　飛び出した

小さな命は　五つの命
五つの命を　二つの目が　そっと優しく見つめてる
初めてなのに　誰も教えないのに
その目はもう　お母さんになっていた
もちまんじゅうのような　柔らかな
小さな命　抱くように
小さな命を　見守るように

飛び出した五つの命
初めてなのに　誰も教えないのに
すぐにお母さんを知った
小さな命　五つの命
まだ開けきれぬ　十の目が
精一杯生きようと
お母さんの　お腹を見つめてる
お腹をベッドに眠ってる

お母さんのぬくもり　甘えるように
小さな命を　預けるように

おじいちゃんが山で亡くなって一年も経(た)たない内に、桃子の子供が生まれたのです。死があれば生もある。命の仕組みって不思議なものですね。
この後、お父さんは少し成長した仔犬たちの里親探しに奔走(ほんそう)していましたが、最後の一匹がなかなか決まりません。そこでお父さんは、「血統書(けっとうしょ)を付けるからそれに餌を一か月分プラス」と、会社の人に頼み込んで引き取ってもらうことにしました。その血統書にはつぎのようなことが書かれていました。

血統書

仔犬

種類：　純粋の雑種
性別：　メス
毛色：　黒（父親似）

父

名前：　名無しの権兵衛
種類：　これまた雑種
毛色：　黒ただし縮れ毛
容貌（ようぼう）：　目つき少々悪し
性格：　放浪癖（ほうろうへき）あり（現住所不明）

母

名前：　桃子
種類：　またまた雑種
毛色：　茶
容貌（ようぼう）：　雑種にしては美人
性格：　愛嬌（あいきょう）いま少し

これで五匹とも無事里親が見つかりました。

最後の一匹を連れ出そうとした時、桃子が大きな唸り声をあげました。
「犬だって分かるんだよ」
たまたま傍にいたタケばあちゃん。その顔はとても寂しそうでした。

カプセル　四

散歩道

・・・・・五匹の仔犬が貰われていった後、一時やつれていた桃子ですが、じきに元どおり元気よく散歩するようになりました。桃子との散歩道は、季節季節で色々の美しい姿を見せてくれました。四季の移ろいを桃子とともに眺めながら、ママはちゃんと、お父さんとの約束を守っていたのよ。でも、そんな散歩道にも・・・・・

四季それぞれの姿を見せる散歩道。
春、枯れたように見えた路肩の雑草も春には緑を生じさせます。ふっと気がつけばあたり一面つくしん坊の小さな林、梅桃桜（うめももさくら）が競って咲きそろい、明日美の大好きな黄色のじゅうたんのように群れ咲く菜の花畑などなど、春は人も植物もわくわくする季節です。
夏、田んぼの稲もしっかりと成長し、穂先（ほさき）には膨（ふく）らみが見えています。夏の朝、稲葉（いなば）には玉露（たまつゆ）が宿（やど）り、お日様の光を受けて蛍（ほたる）のようにキラキラ輝いています。沢山の背の伸びたひまわりの大きな花が、お日様のような顔を向け夏の暑さを語り合っています。

秋、赤とんぼが、一日中遊びまくってすっかり日焼けした子供のように、真っ赤な姿で気持ちよさそうに青い空に群れをなして飛び交います。子供たちが家路を急ぐ夕暮れ時、稲を刈り取った田んぼから、もみ殻を焼くうす煙がのんびりと立ち込めています。

冬、全てが真っ白な雪で覆われ、汽車が奏でる線路の音色も、積もった雪の中に吸い込まれてしまいます。防寒服から覗かせる子供たちの、赤いほっぺが降りしきる粉雪の中で揺れています。

時は移ろい繰り返しています。色々な姿を見せる季節、時は季節のお化粧係と云われるのもうなずけますね。

移りゆく季節の中で桃子はのびのびと散歩を楽しんでいました。

でも、そんな散歩道にも、目をそらしたい見たくもない姿もあるのです。

ある夕方のことでした。桃子を連れて気分よく散歩に出たときのことです。

「あっ、桃子ダメ！　そんなことをしたらダメじゃないの」

明日美は桃子が路上のフンに鼻を近づけたのを見て、慌てて引き綱を手繰り寄せました。

「ダメよ、あんなものに、そばへ行かないで」

舗装された歩道の路肩にコロコロしたフンが幾つかあったのです。

「あら、こんなところにも、やだねぇ桃子もいやでしょう？」

桃子は何かを探るような顔つきで、鼻を寄せてはクンクンと立ち止ってしまうのでした。

散歩道の途中、何個所かにフンがありました。中にはすでに誰かが踏んづけたように、ぺちゃんこになっているのもあったのです。いつだったか、夕暮れ時に、ズックの裏がフニャっとした妙な感触を受けたことがありました。何だろうと見たら路面にフンがあったのです。このときばかりは明日美も散歩をするのが嫌になりました。

農道の散歩道には、立て札が立っていました。

「飼い主へ　犬のフンは持ち帰るようお願いします」。

でも堂々と言うべきか、その立て札の下に大きなフンがころがっています。明日美には、どうしても他所の犬のフンは取る気にはなれません。桃子が臭いを嗅いでいるときは、「ダメ！」と綱を強く引

っ張りその場を大急ぎで離れることにしています。

帰り道、桃子が草むらでオシッコをし終わったとき、クラスメイトの男の子がニヤニヤしながら通り過ぎていきました。明日美はちょっと恥ずかしくなりました。メス犬はウンコの時と似た姿勢で用を足しますので、ちょっと離れた場所からは見間違われてしまうのです。

スーパーの買い物帰りのおばさんたちの声がしました。

「いやーねぇ、どうなってんの、これ！」

見ると、フンを見つけ慌てて避けているのです。

「飼い主のマナーがなってないわ」

そう言いながら、意味ありげに明日美の方へ顔を向けました。

「そうそう、これじゃーねぇ」

「何とかしてもらいたいわ」

聞こえよがしに、話しているのです。

明日美は、自分じゃないのに自分が言われているみたいで、散歩しているのが恥ずかしくなり、逃げるようにさっさと駆け出してしまいました。

「散歩なんかもういや」珍しくお母さんに愚痴をこぼしました。

そばにタケばあちゃんもいましたが、聞いていたのかどうなのか、ただ黙っているだけでした。

明日美は散歩に出かけるのが憂（ゆう）うつになりました。でもお父さんとの約束は約束です。止めるわけにはいきません。

お母さんに言われて散歩に出るときは、スーパーのレジ袋とハサミ道具を持っていきますが、散歩している人の中には、手ぶらで歩いている人を見かけます。一体あの人達はどうしているんだろうとちょっと心配になりました。

散歩道のひとつに、芝生（しばふ）で整備された河川敷（かせんじき）があります。天気のよい日には家族づれで賑（にぎ）わい、シートを敷き楽しそうにお弁当を食べている人たちもいます。

でも、明日美が注意して見ると、そんな憩いの場にもフンが落ちているのです。

せっかくの楽しい雰囲気が台無しになってしまいますが、桃子以外はどうしても気持ちが悪く、目をそらして通り過ぎてしまうのでした。

明日美は、散歩のとき何となくクラスメイトと会いたくはなかったのですが、ある日、運悪くガキ大将の健太とその取巻き連中と出会ってしまいました。健太は帽子をちょっと横丁にかぶり、網の付いた竹棒を手にしていました。日焼けし

た顔にギョロつかせた目が何か獲物がいないかと物色しているようでした。「いやな奴」と素知らぬ顔で桃子に目を向けたちょうどそのとき、桃子がウンコをしようとウロウロし始めたのです。

「おお、明日美、今頃散歩してんのか？」

健太はそれを見ながら、声をかけてきました。

「そうよ、いつもはもうちょっと早いんだけど。毎日やってるわ」と、（どうでもいいから早く向こうへ行って）とばかり桃子に目を向けたまま、早口で応えました。桃子が、腰からお尻にいたる部分を丸めるようにしてウンコを出し始めました。そのとき何を思ったのか、健太が、足でふんばるような格好をしていた桃子の尻をポンと蹴ったのです。

「何すんのよ！」

びっくりして健太を睨みつけました。

目の前の細い農業用水路に桃子が落ちてしまいました。取巻き連中は、バチャバチャと慌てている桃子を見ながら腹を抱えて笑っています。明日美は文句を言うより、桃子を引き上げるのに精一杯です。桃子が暴れるので明日美もあちこち泥水で汚れてしまいました。やっと引き上げ終え、泥水で汚れた桃子の顔を見て思わず涙が出てきました。

「どうしてこんなことをするの！」

「それより、こんな所でウンコなんかいいのか？」

健太はしゃあしゃあと逆襲してくるのです。取巻きも、「そうだそうだ」と一緒になってはやし立てました。どうも喧嘩の仕方は、健太の方が一枚上手のようです。しかし、気の強さにかけては明日美も負けてはいません。

「ちゃんと始末するんだからいいじゃない！」

「じゃあ、早く拾えば・・・」

それには応えず、明日美は睨み返しました。

「どうしてこんな可愛そうなことするのよ！」

桃子を指差しながら口にする明日美の剣幕と涙を見てひるんだのか、連中はさっさと遠のいていきました。腹の虫が収まらないのですが、通りすがりの人が結構いたことや、汚れた桃子のこともあり急いで家へと連れて帰りました。

桃子との散歩も楽しい日ばかりとは限らないのです。

カプセル　五

びしょ濡れて

・・・・・ママが通っていた小学校は、田園風景豊かな町の小高い丘の上にありました。校庭は広くその周囲はツツジや桜の樹が植えられ春先には満開の花に覆われます。教室の窓からは田畑が向こうの山まで続いていました。稲田は季節により、緑色や黄金色のじゅうたんとなり四季の移ろいを感じさせてくれました。当時、校舎はまだ木造の部分が残っており、子供心にもぬくもりを覚えたものです。そんな中、五年生になったママにはこんなことがあったのです。

親にも学校の先生にも理解してもらえない苛立ちから、ママの心は、だんだんとびしょ濡れになっていきました。それは、消えることの無い辛く苦しい思い出の始まりでもありました。

タケばあちゃんの異変は、明日美が小学校五年生になったばかりの春頃からでした。あんなに話し好きではっきりとした大きな声のタケばあちゃんが、だんだんと無口になってふさぎこむようになったのです。動作も以前のようにシャキシャキとしたところが見受けられなくなりました。また、時々物忘れをするようになったものですから、両親はもしかして「ちほう症」かと心配していました。明日美にはその病名がどんな病気なのかは、ぼんやりとしか分からなかったのですが、お父さんが、タケばあちゃんを説得して病院へ連れて行きました。

「老人性のうつ症です。まだ軽い状態ですから、そう心配なさらなくていいでしょう。薬物療法（やくぶつりょうほう）で対処できますが、それ以上に何か張り合いを持たせるようなことを考えられたらどうでしょうか、例えばおばあちゃんの趣味をいかすとかね。それと、誰か同世代の話し相手でもいればいいんでしょうけどねえ」

お医者さんから告げられたのは、こういうことでした。

両親は「ちほう症」でなくほっとしましたが、タケばあちゃんの趣味といってもおじいちゃんが生きていれば、山へ行くことが出来たでしょうが。同世代の人といえば幼なじみの近所のマサさんぐらいです。趣味は若い頃、和裁を習ったということですが、最近は針の目を通すのも苦労しているようですから、その他に

はこれといったものが浮かびませんでした。おじいちゃんが亡くなって二年目の頃でしたから、やはりそのことが積もり重なって、というのが一番の原因だったのでしょう。今になってみると、生活に張り合いを失うことが、人の身体を弱くしてしまうものだということは理解できますが、その頃の明日美にはまだそこまではよくわかりませんでした。ですから、そんなタケばあちゃんを気遣うなんて、全く考えも及ばないのでした。

同じ頃、学校でも嫌なことが起こっていたのです。

その日、明日美は朝登校して、いつものように明るく〝おはよう〟と言おうとして「おっ・・」と声を飲み込んでしまいました。教室の黒板に大きな文字が書いてありました。すぐに自分のことだと分かりました。明日美が一番気にしていたことだったからです。そこには、

〝　あすみのばあちゃん　ウンコ拾い　くさいくさいウンコ

あすみはウンコのにおい　〃　とあったのです。

ばあちゃんとは、明日美の〈タケばあちゃん〉のことでした。

「だれ！　だれよこんないたずら書いたのは！」

教室には、クラスのガキ大将の健太（けんた）と、そのグループ五人がこそこそ笑っています。その外、女の子たちも数人いましたが、明日美にはすぐに分かりました。健太です。こんなことをするのは。明日美は目をまん丸にして健太の方を見ながら大きな声で怒りました。

「健太でしょう！」

「俺じゃないよ」

「じゃ誰よ」

「そんなこと俺に聞いても知らねーよ」

健太は机に腰掛けながら、他の子達に同意を求めるような仕草をしています。明日美はひとり一人男の子の顔を見すえました。そのたびに男の子たちは目をそらして、俺も知らないよという顔をしているのでした。

明日美は幼稚園の頃から明るく気の強い元気な女の子で、男の子を泣かすくらい簡単なことでした。学区（がっく）が同じなので小学校には、そんな明日美の幼稚園時代を知っているクラスメイトが沢山（たくさん）いるのです。学年が進むに連れ、タケばあちゃんに似たぽっちゃりとした面立ちと、くりっとした大きな目が男の子をひきつけ

ているのですが、その大きな目が一旦怒り出すと相手を威嚇するようなきつい目つきに見え、それに、はきはきした言葉使いが、他の子供たちにはビシビシ言われるようで怖かったのでしょう。だからこういうイジメは、いじめる側の子にも勇気がいることでした。でも健太は四年生の時転校してきましたので、その辺のことは知りません。もっとも一年生や二年生時代ならともかく、五年生くらいになると個性も体力も違いが出てきますから、今までの様にはいかなくなってきたのも事実です。それに明日美自身、反抗することが、タケばあちゃんのやっていることを、これ以上波紋を広げてしまうことになるのではと我慢していました。冷静に考えれば、子供にありがちな単なる「からかい」で大したことではないのでしょうが、ただ、クラスみんなの前で言われると無性に腹が立つのです。明日美の自尊心が許さないのでした。黒板拭きで大急ぎで、まず「ウンコ」の文字から消していきました。その日の学校での一日はとても長い一日でした。でも、このいたずらは今日だけではなかったのです。ある時、こんなこともありました。

「明日美はくさい女の子。だれもそばへ寄るな」

机の上にわら半紙の切れ端(はし)が貼ってありました。また放課後、帰ろうと下駄箱を開けたらやはり同じような文面があったのです。明日美にとって実に嫌(いや)な汚い言葉でした。友達同士で話している姿が、みんな明日美のことを意地悪しているように感じるのでした。この年頃は「美」というものにめざめる時期で、これに関係している言葉には敏感なのです。そんなときに意地悪な汚い言葉を言われるのですから、なおのこと、とても耐えられないのでした。気のせいか友達も少しずつ遠ざかっていくように思いました。

イジメの始まりはこんなことからでした。

「おい、あれは明日美んちのおばあちゃんじゃないか？」

健太と数人の仲間がふざけあいながら歩いていた学校の帰り道、健太の指の先に野良仕事風(のらしごとふう)の格好をした一人の年寄りの姿がありました。

「そうかもな」

「なにやってんだろう」

そっと近づいてみると、タケばあちゃんが黙々(もくもく)と犬のフンを拾ってはビニール

の袋に入れていたのです。路肩の草むらにはフンが所々にあるのです。それどころか、大胆にも歩道の真中にころがっていることさえあるのでした。

「へぇー、ウンコ拾いか」

「汚ねーなぁー」

「臭い臭い」

健太達は通り過ぎながら、わざとタケばあちゃんに聞こえるように言いました。この当時、まだ放し飼いも見受けられたし、引き綱をつけて散歩している人の中にも、フンの始末をしていかない人もいたのです。だから結構フンは目についたのでした。

健太達はタケばあちゃんの姿を目撃してから、冗談半分に学校で言いふらしたのです。

「オイ、明日美、お前んちのおばあちゃんがウンコ拾いしてたぞ」

「ウンコ拾ってどうすんの」

「明日美も犬連れて散歩してんだろう」

桃子のことはクラスメイトも知っています。

「お前も拾ってんのか？」

「桃子の分は、ちゃんとやってるわ」

「じゃあ、おばあちゃんは、よその犬のウンコを集めているの？」

「知らないよ」

「おばあちゃんはウンコ係りか」

次々と男の子達は明日美に浴びせ掛けます。

「違うよ、そんなこと。おばあちゃんはやらないよ！」

「この前みんなで見たんだぞ」

「うそよ！」

明日美は必死で反論しました。

教室の他のクラスメイトもニヤニヤしながら聞いていました。

「ねぇ、おばあちゃん、クラスの子から、おばあちゃんがウンコ拾ってるって言われたんだけど、それって本当？」

家に帰るなり訊ねたのです

「そうだよ」

タケばあちゃんはあっさり認めました。

「それがどうしたの」

「そんなこと、おばあちゃんがしなくたって・・・やめてよ」

「別に悪いことをしてるわけじゃないんだから」

「でも汚いじゃない、みっともないじゃないのよ」

「そうかねぇ、そんなことないとおばあちゃんは思っているけど」

「とにかくやめてよ、お願いだから」
「でもね、これは・・・・・・」
言いかけたタケばあちゃんは言葉に詰まってしまいました。
「おばあちゃんがウンコ拾っているの、お母さん知ってた？」
夕方戻ってきたお母さんにも明日美は聞いてみました。
「知らないわ、そんなことやってんの？フーン」
お母さんは別に嫌がる風でもなく、また明日美に同情するようなことも言ってくれません。
「クラスの子が、ウンコ拾い、ウンコ拾いって意地悪いうの。おばあちゃんがウンコ拾ってるのを見たってみんなに言いふらしているのよ。おばあちゃんに聞いたら本当だって。私いやだわ、そんなことされるのは」
タケばあちゃんのウンコ拾いを、クラスメイトに見られているのがとても恥ずかしく、教室の中に自分の居場所が無くなってしまうように感じたのです。
「困ったねぇ、あとでおばあちゃんに聞いてみるね」
困ったねえ、と言いながらもお母さんの目と手は夕食の支度に向いているのでした。
明日美は本当にタケばあちゃんがやっているなんて、認めたくもましてや想像したくもありませんでした。
イジメは冗談半分（じょうだんはんぶん）から始まったものの傷口は癒えるどころかどんどん広がり、明日美の心はすっかりびしょ濡れになっていきました。
「タケばあちゃんに、もうやめてって言ってよ！」
イジメにあうたびに家に帰っては、お母さんに教室での出来事を訴えました。
「犬を飼っている家は沢山あるんだから、タケばあちゃんがやることはないって。人にからかわれながら何でやるのよ！」
明日美は精一杯お母さんに訴えました。
「またなの？」
お母さんもだんだんとうんざりとした顔になってきました。
お母さんは、自転車で十分位離れた工場にパートとして働いています。家に着くなり、明日美からまた同じ話を聞かされるのです。学校へのお便り帳にも何とかして欲しいと書いて出しました。そうすると、しばらくはいたずらは止まりますが、ほとぼりのさめたころ、また繰り

返されてしまうのでした。

「おばあちゃん、明日美が学校でいじめにあうからもうやめてくださいな。おばあちゃん一人がそんなことをしたって無駄ですよ。町の環境課にでも話をしたほうが早いわよ」

最初の頃は、ほっといたお母さんでしたが、いつも同じことを聞かされイライラしてくる気持ちの矛先(ほこさき)を、ついタケばあちゃんに向けてしまったのです。

「・・・・・・」

タケばあちゃんは黙ったままでした。

タケばあちゃんのウンコを拾うときの格好は、明日美の目にはとてもクラスメイトに見せられない姿と映るのです。ヨレヨレのモンペをはいて、手ぬぐいで頬かむりして、その上から色あせた麦わら帽子を被り、ビニールの袋と囲炉裏(いろり)の炭ばさみを持って、がお決まりのスタイルでした。冬場には麦わら帽子の代わりに防寒用の帽子に防寒服を着て、足元はこれまた防寒靴といういでたちになります。以来、春夏秋冬、雨の日も雪の日もかかさず朝と夕方の二回、桃子の散歩時間帯を少しはずし、明日美にも会わないように出かけていくことになるのです。タケばあちゃんは何故こんなことをやるのか理由は一切しゃべりません。ただ黙ってやっていました。

明日美はくり返し、お母さんからも自分と一緒になって、タケばあちゃんにやめるように言ってくれとお願いしました。時には泣いたり時には怒ったりして、お母さんやタケばあちゃんにくってかかりました。

「おばあちゃんのために、何で私が犠牲(ぎせい)にならなければいけないの。おばあちゃんは、わけも分からないから良いだろうけど、わたしの身にもなってよ！」

「・・・・・・」

タケばあちゃんは何か言おうとしますが、口がついてこないのか黙ってしまいました。

「汚いおばあちゃんなんか、いらない！」

五年生くらいになるとファッションにも目が向いてしまいます。身に付けるものもお母さんのお仕着せでなく、自己主張しながら自分で選んだものに執着するようになり、洋服の種類も多く周りからはハイカラな姿と映っていました。テレビにも可愛い洋服を着た少女が出てきます。憧(あこが)れのスターもいて明日美の胸をと

きめかすそんな年頃になりました。だからなお気になるのでした。

「私まで汚(きたな)いって言われるのよ」

タケばあちゃんは黙ってうつむいたままでした。

「明日美のこともあるので・・・」

お母さんは、タケばあちゃんに、遠まわしに言っていましたが、ある時から何にも言わなくなりました。

それよりも、タケばあちゃんの味方をしているようなのです。

「おばあちゃん車に気をつけてね。暗くなるまでしないで早めに家に戻ってきてくださいね」

などと明日美には、お母さんが諦(あきら)めてしまったように聞こえました。そんな話し方をしているのです。

「これじゃちっとも解決にならない」

明日美にはとっても不満でした。

「おばあちゃんの好きなようにさせてあげて。学校にも折をみて話すから、もう少し明日美も大人になって我慢しなさい」

その後もお母さんは、こんな風に言うばかりなのです。

「先生の言うことなんか誰もきかないよ！」

確かに先生は、「おばあちゃんのやっていることは、素晴らしいことなんだから」と説明してくれるのですが、明日美の悩みの解消にはつながらないのです。

「おばあちゃんだって、ちゃんと考えがあってやってるんだから。おばあちゃんのどこがいけないの」

「お母さんも、私のこと何にも考えてくれないんだから！」

余計イライラしてきました。

明日美はタケばあちゃんが、だんだん嫌いになってきました。嫌いになり始めると不思議なもので、タケばあちゃんのやることなすこと、色んなことが嫌でいやでたまらなくなりました。

「お母さん、頭が痛い」

「熱でもある？　どれどれ、あー、ちょっとあるみたいねぇ」

「・・・・・」

「休む？」

「・・・我慢する」

月曜日の朝になると、頭が痛くってどうしようもありません。学校を休みたくなってしまうのでした。でも学校を休むと一日中タケばあちゃんのそばに居ることになるのです。それを考えると明日美

は休みたくても休めません。
「おばあちゃんなんか居なくなればいいのに・・・」
そんな気持ちにもなりました。
ある日の夕方、だるそうな顔をして学校から帰ったばかりのことでした。
ウンコ拾いを終えて帰ってきたタケばあちゃんと玄関でばったり出会いました。
「どうしてそんな格好しているのよ！なんでウンコなんか拾っているの！」
溜まっていたうっぷんが爆発したのです。
「おばあちゃん！　もうよして！」
明日美が大きな声をあげました。黙ったまま靴を脱ごうとしたおばあちゃんの肩を引っ張ったとたん、おばあちゃんが尻もちをついたのです。「ああー！」と悲鳴に近い声を出してうずくまってしまいました。台所からお母さんが飛び出してきました。
「明日美、なにやってるの！」
状況を察して、おばあちゃんを助け起こし、「けがはなかった？」と尋ね終わったとたん、「パチッ」とお母さんの手が明日美のホホを打ちました。続けてもう片方のホホを叩こうとしたとき、
「ああっ、清美さん！」
タケばあちゃんがお母さんの手を引き止めるように声を掛けました。
「私が勝手に転んだのよ。ねえ、明日美ちゃん」
その言葉を無視するようにお母さんの厳しい声が落ちてきました。
「おばあちゃんに謝りなさい、さあ、早く！」
「謝ることなんかない！　おばあちゃんが悪いんだ！」
「まだそんなこと言ってるの！」
お母さんが明日美の両肩を押さえて言いました。
「もういいかげんにしなさい！」
「お母さんも、おばあちゃんも大嫌いだ！」
その両手を払いのけ泣きながら玄関を飛び出しました。自分がどこへ向かって走っているのか分かりません。ただ夢中で走っていたのです。
気が付くと船川のほとりに立っていました。稲田の遥か向こうの沈みゆく夕日に目もくれず、ただぼんやりと揺れ動く水草を見つめているのでした。
「誰も私のこと分かってくれない」
胸のもやもやを吐き出すように、思いっきり足元の石ころを蹴ったとたん、履

いていた靴がポーンと川の中へ。それを拾う気持ちもわかず、追いかけようともせず流れに沈んでいく様子をただ茫然と眺めているのでした。

「どっかへいってしまえ！」

気持ちがおさまらず、大きな声をあげ、もう片方の靴を投げ飛ばしたその時、後ろの方から声が聞こえてきました。

「明日美ちゃん、明日美ちゃん」

振り向くと、タケばあちゃんがすぐ傍まで近づいてきたのです。

「明日美ちゃん」

「来ないで！」

声をかけながら差しだした手を振り払いざま叫んでしまいました。

「おばあちゃんなんて、いないほうがいいんだ。おばあちゃんは要らない。おばあちゃんなんか死んでしまえ！」

さんざん悪態をつき、泣きながら明日美は裸足のまま、また駆け出していました。

日が暮れても明日美は家に戻りませんでした。船川の土手道を川上に向かい、さらに左手に折れた木立の中に、古びた小さな祠（ほこら）のような建物がありました。ここまで来るに三十分ほどかかったでしょうか。先ほどから、明日美は百葉箱を大きくしたようなその建物の階段の上がり口に膝小僧を抱え寄りかかっていました。裸足で夢中で走ったため足裏がズキズキとしています。誰も自分を理解してくれないという怒りと、足の痛みとで、灯りといえば裸電球がひとつ点いているだけの場所でしたが、不思議と怖さを感じていないのです。（家になんか帰ってやるもんか）そう思いながらお母さんの顔、タケばあちゃんの顔を思い浮かべていました。でも痛みが止まり興奮した気持ちが時間と共に和らぐにつれ、やはり女の子です。木の枝がすりあうような音が聞こえたり、少し離れた所で背の低い木が揺れるたびに、そこに誰かが潜んでいるようで気味が悪くなってきました。そうかと言って、今これからきた道を戻る勇気もないのでした。自分で自分の身体を保護するように、小さな身体を丸めてじっとしていました。そのうち目を閉じていると疲れからか、ウトウトとしてきました。その時です。「明日美、明日美」と呼ぶ声が聞こえてきたのです。恐々目を向けると、裸電球の灯りに映し出されたのは、なんと死んだはずのおじいちゃんでした。ひげ面で怒ったような顔をしています。

「明日美、だめじゃないか、みんなを心配させて。さあ、一緒に帰ろう」

伸びてきた手に、思わず身体を固くして悲鳴をあげようとした明日美の前に立っていたのは、おじいちゃんの一番下の弟だったのです。

家では明日美が帰って来ないと大騒ぎになり、そのうちに親戚も加わってタケばあちゃんの話から考えられる方角を四方八方探し回っていたのでした。

カプセル　六

ワイパー

・・・・・車のワイパー、雨粒をぬぐいさったときってスッキリして気持ちがいいよね。びしょ濡れの心をはらってくれるワイパーってあるのかな？

五年生のクラスは六年生に持ち上がりでしたから、クラスメイトの顔ぶれは変わりません。相変わらずイジメは続いていました。

夏休み明けのことでした。ひょんなことがきっかけで、健太が他のクラスの子と取っ組み合いのけんかをしたのです。校舎の隅のごみ置き場の近くでした。

「オイ、道夫お前野球ゲームいつになったら返すんだ」

「もうちょっとで返すよ」

「もうちょっと、もうちょっとって、お前何回同じこと言うんだ」

「だから、もうじき返すって言ってんだろう」

「なんだよ、その言い方は、ふざけんなよ」

道夫がなにか言おうとしたのですが、健太は口より手が早かった。バンバンと道夫のほっぺたを思いっきり叩いたのです。二回目に叩いた手が鼻にも当りました。

「いてーなー、殴ることはないだろ！」

今度は、道夫が逆切れしました。

「よーし、道夫やる気だな」

「お前が先に殴ったんだぞ」

「なに言ってんだよ、それだったら早くゲーム返せよ」

こうして二人は取っ組み合いになったのです。健太が優勢でしたが、ちょっとした加減で、尻もちをついたとき運悪くそこに大きめの釘のついた板切れがあったのです。健太の尻に強烈な痛みが走り

ました。

「ウァー、イテェー！」

健太の大きなうめき声で、道夫はびっくりして逃げてしまいました。異変に気づいたクラスメートが駆け寄りはしたものの、健太の苦痛に満ちた顔を見て尻込みしてしまいました。

「先生に知らせてくる！」

ひとりが慌てて走っていったのと、入れ違いに逃げ出した道夫が恐る恐る健太の近くまで戻ってきてそっと覗き込んでいました。

病院で検査してもらったら、肛門のすぐ近くに釘が刺さり、そこから一センチほど肉が裂けていたそうです。そのまま入院してしまったのです。手術で縫い合わせる必要がありました。さあ、それからが大変でした。

「ハイ、ガーゼ取り替えますからね、お尻出してくださーい」

看護婦さんから言われると健太は、ベッドに仰向けになりながら、ひざを胸に寄せつけ両ひざを両の手で胸に押し付けるように支えるのです。自分ながら変な格好だなと、取り替えるたびに恥ずかしくなるのでした。お尻を見せると看護婦さんは塗り薬の付いたガーゼを当てて手際よくバンソウコーで止めました。入院は一週間程でしたが、トイレの苦痛を健太は初めて味わったのでした。トイレで腰を下ろすとビリビリと傷口が痛むのです。まして、ウンコを済ました後、ちり紙で拭うときは、怖い物に触れるようにそっとやさしくしないと、思わず飛び上がりそうになるのですから。子供心にも看護婦さんにお尻を見せて拭いてもらうことは実に苦痛であり、惨めであり、恥ずかしくもありました。

喧嘩相手の道夫も親と一緒に謝りかたがた見舞いに来ました。

「申し訳ありませんでした」

道夫の両親はそう言って、申し訳なさそうに健太の母に頭を下げました。

「いえいえ、喧嘩はお互い様ですよ。もうちょっとましな所に尻をつけばいいものを」

苦笑しながら健太の母は応えていました。

もう喧嘩どころではありません。

その後クラスメイトもお見舞いに来てくれたのですが、健太は会いませんでした。顔が真っ赤になるほど恥ずかしかったのです。

イジメのリーダーであった健太に気持

ちの変化が見えました。子供心に嫌な体験と感じたのでしょう。人に見せたくない自分の弱い部分を、他人に触れられる辛さを感じたのかも知れません。健太の気持ちの変化が他の男の子にも伝わったようなのです。そんなことがあってから、不思議にも明日美に対するイジメが影をひそめてしまいました。

しかし、イジメとは性質が異なるものの、「明日美ちゃんのおばあちゃん見かけたよ」とか「おばあちゃん、がんばっているねえ」などの何気ない善意の言葉でさえ嫌な気持ちになるのでした。

その後、健太は中学生になる直前、父親の転勤で他県に引っ越して行きました。

・・・・・・・・・・・・・・・・

明日美も中学生になりそして高校生になりました。

部活（ぶかつ）や受験勉強など自分の生活で精一杯で、休日も出かけることが多く、タケばあちゃんと接する時間は、どんどん少なくなってしまいました。

でもそんな中で桃子との散歩はやりくりしながら続けていたのです。タケばあちゃんのウンコ拾いはその間もずっと続いており、そのウンコを拾っている様子は、女の子から少女へ、そして乙女へと変化している明日美の、美しさを装（よそお）いたいという願望とは正反対の姿であり、自分の身近に絶対いて欲しくない醜（みにく）い姿と映っているのでした。そのせいで、明日美とタケばあちゃんとは、心の垣根（かきね）がまだ取れないままだったのです。明日美の胸に、一度できたわだかまりは、イジメが終わって中学生になっても、高校生になっても、その片隅からずーっと離れませんでした。中学・高校の六年間は、タケばあちゃんに痛みや苦しみを押しつけたまま過ごしていたと云えるでしょう。タケばあちゃんは以前にも増して動作や会話の反応が鈍（にぶ）くなってきました。明日美の目には、ますます何を考えているのか分からない、よそのおばあさんと映りました。それでもお母さんは、自分の方からタケばあちゃんに何やかやと話し掛けたり、明日美に向かって、「これをおばあちゃんに渡して」とか「美味しいお菓子を買ってきたから呼んで来て」などと、ぎくしゃくしている二人の間を取り持とうとしている様子でした。けれども明日美はそれらを一切無視していたのです。こうした態度をお母さんからは何度とな

く強く叱られ、叱られるたびにさらに意固地になって反抗していたのでした。当時、明日美はタケばあちゃんの部屋を通らないで自分の部屋に行けたため、顔を合わせる必要もないのでした。たまに食事で一緒になりますが、食べ終えると明日美はすぐに自分の部屋に篭ってしまいました。

高校を卒業すると明日美は東京の大学に進み、一人暮らしをすることになりました。親元を離れ故郷を離れて、煩わしさから解放されたことも手伝い、随分大人になったような晴々とした気持ちになっていました。「やはり東京は良い」楽しみはあちこちに満ち溢れているように思えました。女子寮に入らずアパート住まいにしたのも開放感に浸りたいという願望が強かったからでした。学校からの帰り道、スーパーで食材を買うのも生きることと直結した作業と思え、生活者という一面を実感していました。しかし、間もなく、いたる所きらびやかな人工照明で夜の無い状態の街に、田舎育ちの目には違和感をおぼえてきました。その反動もあり、しばらくして明日美は、サークル活動の「星空観察会」に席をおいたのです。

初めて会合に参加したとき、斜め前に座った人の横顔が目にとまりました。

「あれっ？」　どこかで見たような錯覚を覚えたのです。ぼんやりとした頭にある顔が浮かんできましたが、そのときは「まさか」と思い、サークル活動の説明に聞き耳を立てていました。

「星空観察会」というネーミングから、休日に晴天の山や高原で星空を眺めて楽しむ、ただそれだけのことと考え入会したのですが、星座や星の一生広くは宇宙のこと、私たちの住む太陽系のことなどを勉強するにつれ、明日美のサークル活動に対する取組み姿勢が変わってきました。

夏休みになって、長野の高原にみんなで出かけたときのことです。先輩が一年生に

「オーイ、いいか、出来るだけ平坦な場所に敷くんだぞ」

と指示を出し、持参したシートが敷かれた頃合を見計らって、

「今からみんな仰向けに寝て空を見るんだ」

当時、二十名ちょっとの人数だったと

思います。みんな思い思いに、一斉に仰向けになりました。こんなにたくさん星があったなんて、こんなに輝く星が見えるなんて、澄んだ夜空にきらめく星たちを眺めながら、子供の頃、タケばあちゃんと見たホタルの群れを思い出してしまいました。

「北極星のあの光は約四百年前のメッセージだよ」

「あの星は百年前の・・・」

「こっちの星は二十年前・・・」

などと色んな星を指差して先輩は教えてくれました。それを聞きながら眺めていると、現在と過去が一気(いっき)に接近したように感じ、胸がジーンとしてくるのでした。

「宇宙は百五十億歳、太陽は五十億歳、地球は四十六億歳、すごいでしょう?」

「それに較べたらさあ、人は頑張ってもたったの百歳、ああ小さい小さい」

ふだん街にいる時は口にしないような言葉も、つい飛び出してしまいます。

「百五十億歳を百メートルの長さに置き換えたとき、人間の百歳は砂粒ひと粒にも満たないんだって」

これらの事柄は、幼い子供でも知っているありふれた話でしょうが、受けての心理状態によって、新鮮で胸に敏感に響くときがあるものだと思います。

先輩がこんなことを言っているのを聞き、明日美は、この考えられないほどの時間の隔(へだ)たり、そして宇宙の雄大さに、人間の存在のちっぽけさを感じるのでした。

「百歳でそうなら、わずか十九歳の私は・・・」

そんな気持ちになってしまうのです。途方もなく遠い存在に思いを馳せることで、一番身近な自分自身を見つめなおすことが出来るのかもしれません。せき止めていた石ころがどけられ、よどみなく流れ出した清水を見るように、胸のつかえが消え清々しい軽やかな気分になるのでした。それほど星空は、不思議な魅力一杯なのです。

明日美は今まで何年もの間、星空を見上げることを忘れていたように思えてなりませんでした。

カプセル　七

タケばあちゃんの背中

・・・・・　家にいても殆ど言葉も交わ

さなかったタケばあちゃん。何年ぶりでしょう、タケばあちゃんの背中に触れたのは。タケばあちゃんに関心を寄せようともしなかったママ。凍えかじかんだ手のひらに注ぐシャワーのお湯のように、ママの心にも、タケばあちゃんのぬくもりが戻ってきたのです。

「タケばあちゃんの具合が悪いの、胃に腫瘍がね・・・近いうちに一度顔を見せて」

電話では病気の詳しいことは言いませんでしたが、お母さんの押し殺したような声で何となく悪い予感がしました。大学生として初めての夏休みも、サークル活動などで飛び騒いでいましたから、お母さんから「たまには電話でもかけて頂戴」と催促されるほど連絡もしていなかったのです。そんな夏休みを終えホッとひと息ついた九月のある日、お母さんからタケばあちゃんの具合が悪いとの知らせが入ったのでした。

「週末には帰るから」

そう電話で告げてから明日美は、切符の手配で最寄りの駅に歩き出しました。

「具合が悪いの」と話すお母さんの低く疲れた声が耳に残っていました。

金曜日の夕方の電車に乗った明日美は、故郷に近づくに連れすっかり暗くなった車窓を眺め、遠い民家（みんか）のたた住まい、その電灯の明かりに、「あの一つひとつの窓明かりには、それぞれ暮しがあり家族がいる」と半年ぶりに帰る我が家の様子を思い浮かべていました。久しぶりの実家には、大学を卒業して通信関係の会社に就職したお兄ちゃんも来ていました。桃子が明日美の顔を見るなり、全身をくねらせ耳をうしろに伏せ、そしてちぎれんばかりに尻尾を振って、忘れていないことを証明してくれました。

タケばあちゃんは、六階病室の窓際のベッドでやや横向きに寝ていました。そーっとベッドに近づき覗き込んだ明日美の目に、タケばあちゃんの青白い顔が浮き出ている土色のシミのせいで青黒く映りました。こんな小さな身体だったのか、掛け布団の膨らみが訴えているようでした。明日美は自分の目を疑ってしまいました。

「ほんとにタケばあちゃん？」半年前の姿からは想像も出来ないのです。

そう思いながら恐る恐る肩から腕、指へそっとなぞっていきました。こんな細い腕だったのか。ごつごつとした感触が伝わってきました。その手触りで、自分の存在が長い間、タケばあちゃんから離れていたことを痛感したのです。そして、はるか昔、この身体に背負われていたのかと思いながら、そっと背中に手を這わせました。「明日美のこと、ずーっと気にかけていたのよ、おばあちゃんは・・・」お母さんのささやくような声が胸にずっしりとのしかかってきました。

寿命というべきか、明日美を見届けた安堵からなのか、翌々日、タケばあちゃんは痩せた小さな身体を横たえ静かに息を引き取りました。七十三歳でした。

翌週の日曜日、近所のマサおばあちゃんがお茶を飲みにやって来ました。マサさんは、タケばあちゃんの尋常小学校以来の友人の一人です。学校では、タケばあちゃんと机が隣り合わせだったのです。

「さあ、どうぞどうぞ」

お母さんが座布団を敷きながら招き入れました。

明日美は挨拶を済ませると、隣の部屋で小物の後片付けをしていましたが、マサさんの話し声は良く聞こえていました。

「どうですね、一段落しなさったかね」

「はい、おかげさまで。お葬式の時は大変ありがとうございました」

「まだ居なくなったなんて信じられんわ、元気なタケさんの顔が浮かんでねえ。ちょっとお参りさせてください」

マサさんは、お線香に火をつけ、しばらく遺影を見つめながら両手を合わせていました。お母さんもマサさんの背中越しから一緒に拝んでいました。

「やはり、タケさんはおじいさんが亡くなったのが、一番ショックだったんだねえ」

「そういうものなんでしょうねえ・・・夫婦って・・・」

「夢でねえ、おじいちゃんがお前も早く山へ来いよって。そんなことも言ってたことがありましたよ。今ごろ二人で山歩きでもしてなさるのかねえ」

マサさんがしみじみと言ってました。

「ほんとにねえ。戦争で苦労して、疎開してからがまた大変・・・」

「タケさんは、明日美ちゃんを見ていると、三十年も昔の色々と切なかったことを思い出すんですって。ことに犬と遊ん

でいる姿がねえって・・・」

おじいちゃんが居なくなって寂しい気持ちと、自分のやることが無い空しい気持ち、それに戦時中の消してしまいたい思い出がいり混じっていたのです。そんなとき、明日美の道端のウンコの話でも耳にしていたのでしょう。

「せめて桃子の散歩道くらいと始めたウンコ拾いも、やってるうちに、ああ今日も一仕事終えたって、爽やかな気分になってきたんですって。先のことをクヨクヨしてもしょうがないんで、その日暮らしだわ私は、なんてことも言ってましたよ」

最初は、まさか、わざわざウンコを拾うために出かけているとは気がつきませんでした。道端に咲く野草の花を取りながら、散歩をしているのだろうと思っていたのです。

「でも、あれからけっこう元気になった様子だったんですけど、病気にはねえ」

お母さんはマサさんに言いました。

「おばあちゃんたちの戦争体験世代は、消そうにも消せない思い出を、沢山胸にしまって生きてきたのよねえ」

「ほんにそうですて」

マサさんのうなずいた言葉には実感がこもっていました。

病は気からとはよく言ったものです。一時気を取り直して健康を取り戻したかに見えたタケばあちゃんでしたが、亡くなるときは、別人のように小さくすっかりやせ細っていました。

葬儀の後始末も終え一段落したのを契機に、明日美は東京へ戻りました。

駅に降り立った明日美の耳に、暑い夏が過ぎた後も店先に吊るされたままの季節はずれの風鈴の音が、心なしか弱々しく聞えてきました。

その音色に明日美は知らず知らずつぶやいていました。

「おばあちゃん・・・」

離れて眺める瞳の中の故郷は、俯瞰図ようです。サークル活動に没頭するようになってから、明日美の心境に少しずつ変化が生じてきたようでした。雑踏の通りを歩きながら、なぜか明日美の胸に言いようの無い寂しさそして罪悪感が込みあげてきました。肩が触れ合わんばかりの駅通りの人ごみの中で、こんなにも賑やかな街中で一人私がいる。熱気の中に感ずる冷気、東京に出てきて初めて味わ

った寂寥感が「おばあちゃん」とのつぶやきから生じてきたのでした。

帰宅を待つ灯かりの無い静まりかえった部屋のドアを開け、電灯のスイッチをつまむ動作には、いつもの快活さが消えていました。部屋の真ん中に置かれた座卓の上には、一輪挿しに黄色の折り紙で作ったかざぐるまがひとつ、ポツンと据えられています。心のすきま風が吹きつけたかのように、そのかざぐるまのカサッとかすかに揺れる羽音が聞えてきました。葬儀のあの慌しさが嘘のようでした。着替えをしながらふと鏡に映る自分の顔に気づき、昔、「明日美はおばあちゃんによく似てるよ」と言われたことを思い出しました。そして、両手でホホをなぞった手に、あの病室での感触がよぎったのでした。

あの日、そっと背中に手を這わせたとき伝わってきたのは、何年ぶりかのタケばあちゃんのぬくもりでした。遠いところに追いやっていた優しい背中でした。幼稚園の頃の、あの温かで豊かな背中の感触がはっきりと蘇ったその瞬間、八年間空っぽにしていた明日美の胸に、突然、タケばあちゃんが戻ってきたのです。明日美にとってタケばあちゃんの背中は、〃心のふるさと〃だったのかも知れません。こみあげる気持ちを抑えながら、病室の窓辺に近づいた明日美に街の灯が、ろうそくの炎が揺れるごとく揺らいで見えたのでした。

タケばあちゃんとの懐かしい思い出が浮かびあがってきました。

明日美が幼稚園に通い始めた頃、一緒に手をつないで連れ添ってくれたタケばあちゃん。朝、せっかく着た制服を脱ぎ捨て、ダダをこねて幼稚園に行きたくないと泣き、柱にしがみついた明日美。

「なにしてんの！　早くしなさい。お母さんは忙しいのよ」

そんなとき決まってタケばあちゃんが助け舟をだしてくれました。

「明日美ちゃん、ほら、服を着ましょうね」そう言いながら

「さあ、おばあちゃんにおんぶしな」

とやさしく背中を向けてくれるのです。お母さんよりずっとタケばあちゃんが好きでした。

あったかな背中でタケばあちゃんはロずさんでいました。

♪　泣いてる子供はどこにいる

泣いてる子供は食べちゃうぞ

あっちに居るのか、こっちに居るのか、見つけーるぞ

ここまでタケばあちゃんが歌うと

♪　泣いてる子供はもう居ない。鬼さんあっちへ行ってーくれ

と明日美がたどたどしい口調で背中で続けます。そして歌っているうちにすっかり機嫌(きげん)を直しているのでした。

タケばあちゃんは即興(そっきょう)の歌が得意のようでした。こんなことも口ずさんでいました。

お空のふたが　はずれたら
そよ風さんが　ささやいた
ほーら　春だよ　起きなさい
土手でつくしの坊や　背伸びした

お空のふたが　はずれたら
かみなり様が　踊りだす
ほーら夏だよ　にわか雨
ネコの親子があわてて　雨やどり

お空のふたが　はずれたら
白いススキが　呼びかけた
ほーら秋だよ　赤トンボ
山の友だち誘って　飛んできな

お空のふたが　はずれたら
わた雪ふわーり　宙返り
ほーら冬だよ　葉が落ちて
柿の実ひとりぼっちで
さびしそう

また急な雨の日には、幼稚園の玄関先で、長靴を履(は)いたタケばあちゃんが、小さな黄色の傘(かさ)と、これまた黄色の小さな長靴を抱いて玄関に立っていました。

「あっ、おばあちゃん！」

ニコニコしながら待っているタケばあちゃんを見つけるなり、廊下から玄関まで一目散に駆けて飛びついたものでした。

「はい、明日美ちゃんの長靴ですよ。ズックと履き替えましょうねぇ・・・はい傘もどうぞ」

明日美の大好きな黄色の長靴と傘を差し出してくれました。

雨の日もタケばあちゃんと一緒なら、楽しい日となるのでした。

また夏のある夜、タケばあちゃんとホタルを見に行ったこともありました。

「明日美ちゃん、足元気をつけなさい。ほらしっかりと手をつなごう」

前に行こうとする明日美に手を差し出しました。その手は大きく暖かでした。暗い田んぼ道の細い用水路、丈の伸びた

草むらの上で、あたり一面たくさんのホタルがピカッピカッと光りながら飛び交っていました。
「わぁ、すごい！」
「綺麗でしょう」
思わず明日美はタケばあちゃんの手を振りきって駆け出しました。明日美の目の前から黄色の帯が揺れ動いていました。
「ホラ、ホタルの流れ星だよ」
とタケばあちゃん。明日美は目で追いながら、
「そうか、みんなお星様なんだ」
闇夜（やみよ）の黄色の光は、それはそれは夢のようでした。
明日美は、おばあちゃん子だったのです。
「おばあちゃん、疲れた、眠い・・・」
帰り道そう甘えると、
「そうかい、じゃあ、おんぶしようか」
と言って背中を向けてくれるのです。夏の夜の涼風とタケばあちゃんの揺れる背中が心地よいゆりかごでした。
こんな楽しい思い出は沢山（たくさん）あるのですが、それらがみんないつの間にか明日美の心の隅（すみ）のどこかにいってたのです。消してしまったといった方があっているかも知れません。あんなに明るくやさしいタケばあちゃんが、明日美の目にはすっかり変わってしまい、よそのただのおばあちゃんになっていました。
それが、あの時、昔のタケばあちゃんの姿が戻ってきたのです。
しかし、遅すぎました。この八年間のタケばあちゃんとの距離は余りにも遠かったのです。タケばあちゃんの思い、悩み、苦しみに目を向けず心を閉ざし歩み寄ろうともしなかった自分に、下ろすことの出来ない荷物が背中にずっしり載っているように感じました。
「おばあちゃん・・・明日美よ」
よく見えないと思われる細い目が、明日美の声に反応したように感じ、思わず明日美はもう一度やさしく、
「おばあちゃん・・・今度は明日美がおんぶしてあげる・・・」
もう叶えることが出来ない約束をしたのでした。

カプセル　八

犬嫌い

・・・・タケばあちゃんは、昔、「犬は可愛いけど嫌い」と言ってました。桃子

のことも無関心のように感じました。どうして犬が嫌いなんだろうと不思議に思っても、誰もその理由を言ってくれませんでした。

タケばあちゃんの犬嫌いの本当のことが分かりました。それは、戦時中の辛い体験がそうさせていたのです。

タケばあちゃんの子供に育子（いくこ）という名前の娘がいました。お父さんの妹です。当時育子ちゃんは四歳くらいのまだ幼い年頃でした。その頃、タケばあちゃんの家にサブロウという名前の犬がやってきたのです。オスの柴犬に似た茶毛の仔犬でした。生まれて三ヶ月の頃、そのときは軍需工場で働いていたおじいちゃんが工場の人から貰ってきたのです。

育子ちゃんはその犬を弟のようにして遊んでいました。その姿はタケばあちゃんの目には重苦しい生活の中で、唯一和むひと時でした。首に鈴をつけ、かくれんぼをするのです。物陰に隠れ「サブロウ！」と呼ぶとリンリンリンと可愛らしい音と一緒に駆けてきます。小首をかしげ、あたりをキョロキョロしながら通り過ぎるサブロウに、後ろから「わぁ！」と言うとサブロウはびっくりして育子ちゃんに飛び掛るのでした。あるときは、部屋の畳を一枚取り払って相撲ごっこをしたこともあります。またある時は布団にくるまって一緒に寝たこともありました。サブロウの鼻先が育子ちゃんの額をくすぐっていました。タケばあちゃんが覗き込むと、育子ちゃんの片方の手がサブロウの背中に添えられていました。

「お前、犬臭いぞ」

そうお兄ちゃんたちにからかわれたこともあったほどです。育子ちゃんの上にはお兄ちゃんが二人いました。戦争が激しくなって、高学年の子はクラス揃って地方へ学童疎開をすることになり、お兄ちゃん二人も行ってしまったのです。家には育子ちゃんだけになりました。だから犬が一番身近な遊び相手だったのです。名前の「サブロウ」は、一番上のお兄ちゃんが「雄一郎」二番目のお兄ちゃんが「康次郎（明日美のお父さん）」だから三番目の男の子という意味もあったようです。飼い始めてから三年ほど経ったころ、戦争も益々激しくなり暮らしも厳しくなってきました。各所から戦争に使うからと色んな金目の物が供出させられまし

た。近所のお寺からは青銅(せいどう)で出来た鐘(かね)もいつの間にか見えなくなりました。そうこうしているうちに、まさかと思っていた犬も供出させられるという話が伝わってきたのです。なんでも食用にするためだと言う噂(うわさ)も聞こえてきました。犬は物ではありません。とてもそんなことが出来るはずがありません。考えた末、サブロウを逃がすことにしました。

「いや！　サブロウを捨てるなんて、いや！」

育子ちゃんは必死に抵抗しました。思いっきりサブロウに抱きつきました。知ってか知らずか、サブロウは普段の遊びのようにはしゃいでいるのです。

「育子、離しなさい。サブロウにはこうするほか無いんだよ」

とタケばあちゃん。

おじいちゃんが自転車で散歩するように見せかけながら、随分遠くまで連れて行き、

「いいかサブロウ戻ってくるんじゃないぞ。生きるんだぞ、いいな」

土手の生い茂った草むらでそう言いながら、頭や背中を何回もなで、そしてサブロウの目を見つめ首輪を外しました。しばらく姿を見守っていましたが、何にも知らず茂みで夢中で遊んでいるサブロウの隙をついて、一目散に自転車を飛ばして帰ってきたそうです。その日は今まで以上に暗い雰囲気でした。三人とも黙りこくっていました。カタっと音がするたびに、家族の視線が音の方に向かうのです。誰もが同じことを考えているからでした。助けるために逃がしたけれど、冷静に考えればこれで良かったのかどうか疑問でした。餌も無い中でどうやって生きていけるのでしょう。野犬として捕獲(ほかく)されてしまうばかりじゃないのか。ただ、自分たちの目の前で、確かな形で連れ去られていく姿を見たくないだけの、見せ掛けの善意だったのではないか。タケばあちゃんは、子供を捨ててしまった罪人(つみびと)のような気持ちになったそうです。

三日経(た)った夜、裏の勝手場(かってば)でごそごそ音がするのでそっと覗いて見たら、なんとサブロウではありませんか。幾分肩や腰とお腹(なか)が痩せ、泥がついて汚れていましたが、元気に尻尾を振って身体を寄せてきました。家中がパッと電気がついたような明るさに見えました。

「ダメじゃないかサブロウ、なんでお前帰ってきたの」

と口では言っているおじいちゃんもタケばあちゃんも、戸惑いながらも嬉しそうでした。よほどお腹が空いていたのでしょう。よほどのどが渇いていたのでしょう。タケばあちゃんが差し出した残飯と水をあっという間に平らげてしまいました。育子ちゃんはしっかりとサブロウを抱きしめてやりました。タケばあちゃんがお湯を沸かして身体を綺麗に拭いてやったあと、育子ちゃんはサブロウと久しぶりに一緒の布団で寝たそうです。

「分かった、分かった、お前も一緒に此処に居ろ」

翌朝、思いっきり尻尾を振ってじゃれつくサブロウにおじいちゃんは言いました。タケばあちゃんが昨夜と同じように、残飯にお汁をかけて与えるととても美味しそうにあっという間に食べてしまいました。

「もう無いんだよ、これだけだよ、それで我慢しな」

まるで、疎開しているお兄ちゃんたちに話し掛けているようでした。

それ以降、隣組の人にも黙ってこっそりと飼っていました。でもたぶん分かっていたのだと思いますが、誰も何も口出しはしませんでした。でも、いつなんどき、お役目の人が訪ねてくるかも知れないと思うとハラハラした日の連続でした。

昭和二十年三月十日東京はＢ２９という爆撃機で大空襲を受けました。焼夷弾がまるで花火のように降りかかってきたそうです。そしてタケばあちゃんの家も隣組もすべてが焼きつくされてしまいました。その時に最も悲しいことが、あってはならないことが起きていました。

「お母さん！　お母さん！」

と泣き叫ぶ声が聞こえてきたのです。しかし次第にその声も消えていき、後は周りの騒音と燃える火音、崩れ落ちる屋根の音ばかりでした。

育子ちゃんとサブロウが死んだのです。焼け落ちた柱や屋根瓦などで、逃げるに逃げられない状況だったのでしょう。長く生きられない運命だったといえばそれまでしょうが、そう単純に割り切れる気持ちにはとてもなれませんでした。育子ちゃんの身体は台所の大きな水桶と踏み石の間にこげた柱がのしかかり、その下に倒れていたのです。それほど大きな火傷の跡は見られませんでしたが、水とススと泥で汚れ黒ずんでいました。

その育子ちゃんの上にサブロウがまる

で育子ちゃんをかばうかのように覆い被さっていました。黒ずんだ育子ちゃんの手はサブロウの手をしっかりと握っていたのです。そのとき育子ちゃんは七歳でした。

「ごめんね、助けられなくてごめんね、私たちばかり生きているなんて・・・」

タケばあちゃんは育子ちゃんの身体にとりすがって、泣き騒ぎ、おじいちゃんにうながされてもなかなか離れようとしなかったそうです。

育子ちゃんの汚れた顔と縮れた髪の毛、そしてサブロウの焼け爛(ただ)れた口をやや開きかげんにしたその姿は、タケばあちゃんの目にずっと残っているのです。

「助けて！」と叫ぶ育子ちゃんの声が聞こえてくるのです。タケばあちゃんは、なんでその声の中に飛び込んでいかなかったのかと自分を責め続けました。育子ちゃんの死を、多くの人の死を、そしてサブロウの死を目の当たりにして、この世の生死をいやというほど胸の中にしまいこんできたのです。背中に背負(せお)ってきたのです。だからタケばあちゃんは、犬が可愛くて大好きだからこそ嫌いだったのです。

初めて知った犬嫌いの真実。タケばあちゃんの哀感を共有してやれなかったこと、やろうという気持ちすら持たなかったことに、明日美は胸苦しさを覚えるのでした。

カプセル　九

桃子が・・・・・犬の一生って人の一生を凝縮したようなものですね。タケばあちゃんが亡くなって一年後、桃子が大変なことに・・・。生あるものは必ずいつかは死が訪れるものです。死があればこそ、充実した生が必要なのです。生きることの大切さをわかる人になってください。

桃子の変調に気づいたのは、明日美の上京後、散歩の役が廻ってきたお父さんでした。散歩していると、どうも元気が無いのです。いつもは自転車で一緒に走っても負けないくらい駆けていたのが、歩いて散歩をしているのに途中で座り込んでしまったのです。綱を引っ張っても、いやいやするような素振りを見せ、少しも動こうとしなくなりました。仕方なく

お父さんが抱いて家まで連れて帰りました。

土曜日に、お父さんとお母さんの二人で動物病院へ連れて行きました。検査の結果、肝臓(かんぞう)に異常が発見されたのです。そういえばお腹に水でも溜(た)まっているのか少し膨らんで見えました。いままで少し太ったかなとそんな感じでしか桃子を見ていなかったのです。それが日毎に、膨らみがはっきりと分かるようになって食事も残すようになりました。

明日美は大学生で東京で一人暮らしをしていましたから、電話で話を聞いていただけで桃子の苦しそうな姿は見ていないのです。けれど話を聞くたびにあの校門の茂みでクンクン泣いていた桃子の姿が目に浮かぶのでした。

ある日、お母さんが部屋にいたときのことです。「ガタン」という音が聞こえました。もしやと思い急いで桃子の小屋へ行ってみたら、頭から上半身を小屋に突っ込み、うつ伏せになっていました。抱き寄せようとした両手にはまだなま温かな感触が残り、口元からは少し歯をのぞかせ、目は半分開いたままでした。その瞼(まぶた)を手のひらでそっと撫(な)でてやりました。お母さんは、桃子の最後のときを見届けようと思っていましたがそれも叶いませんでした。帰宅したお父さんは、玄関でひとこと「桃子ダメだった」と聞かされ小屋に行ってみると、ダンボール箱の中に桃子は横になっており、背中を撫(な)でると冷たく硬い感じが伝わってきました。お母さんが手向けた菊の花が一束、桃子の横に置かれていました。

「行ってみたら死んでいたの・・・」

お母さんはまたポツリと言いました。

「まぁしょうがないさ、やることはやったんだもの」

「今日あたり危ないかなぁとは思っていたんだけど」

「野良犬で拾われ、十三年も生きられたって喜んでいるんじゃないの」

「・・・生きものはもうこりごりだわ・・・」

チョコチョコと歩いていた桃子、従順だった桃子、子供を産んだときの優しそうな目をした桃子、貰われていく仔犬を見て怒ったように吠えていた桃子。色んな桃子の姿が思い起こされて胸が一杯になったのだそうです。

二日後の土曜日、お母さんが前日市役所から貰っていた証明書と一緒に、お父さんが自動車で火葬場に運びました。場

所を電話で教えてもらいその道順を辿(たど)りながら着いたところが「ゴミの焼却場」でした。

「ええっ、こんなゴミと一緒？」

思わずビックリしたそうです。受付の人に確認したところ

「いやいや、動物も人と一緒ですよ」

と違う場所を教えてくれました。電話のとき、市役所の係りの人が早合点し、ゴミと間違えたらしいのです。火葬場には人影が見えませんでした。多分そうだろうとあらかじめ準備していたメモ書きをダンボール箱に添付(てんぷ)して置いて帰ってきたということでした。

明日美が大学二年生の秋、タケばあちゃんが亡くなってからほぼ一年経ったときのことでした。

カプセル　十

やすらぎの風景

・・・・・時計の針を徐々に現在に戻していきます。パパとママのことが中心ですよ。二人とも田舎育ちです。「田舎」、「故郷」などという言葉、ママは大好きです。パパとは昔から見えない糸で結ばれていたのかも・・・

夫は同じ大学でしかも同い歳でした。夫は経済学部、明日美は文学部と学部は異なっていましたが、二人とも星空観察会のサークルに所属しそこで出会ったのでした。夫はT県の当時人口四万人の自然豊かな町に生まれましたが、父親の転勤で何回か引越しを経験していました。学生時代デートをすると星空の話はもちろんでしたが、よく子供の頃の田舎(いなか)の話がでてきました。明日美も田舎育ちですから話題としては共感するところが沢山ありました。

「僕の生まれた町はねぇ、見渡す限り田んぼばっかり。田んぼとハザ木と四メートルくらいの川幅の船川(ふながわ)というのがあるんだ。船川は名前の通り、昔農家の人がその船で農作業に行き来していたんだって。親父の子供の頃までは」

「私の田舎でもそんな話し聞いたことがあるわ」

「その船川にいっぱい魚がいるのさ」

「よく行ったの」

「転校する前、小学三年の頃まではよく行ったね、親父に連れられて。夏休みな

んか朝早く起こされて、こっちは眠いのにさあ」
「でも楽しみでもあったんでしょう？」
「うん、ふなやタナゴなんか随分釣れたよ。あの喰いついたときの、グッと来る感触が何ともいえないのさ」
「ふーん」
「僕一人で行くときは、犬を連れて行ったんだ。釣れた魚がピチピチ跳ねるのを見て喜んで飛び回っていたよ。暑くなってきたら半ズボンのまま川に入ってさ、釣りざおそっちのけで魚採り網でザリガニを捕まえたり、ときにはこーんなでっかいナマズがね・・・」
　両手を広げてオーバーに話すのがとてもリアルに伝わってきました。
「ほんとに？」
「そう、それからね、あぜ道のところに狭い用水路があって、雨あがりの増水したときなんかドジョウがバケツ一杯獲れたんだって。最もこれも親父の受け売りだけどね。僕が子供の頃まではまだその片鱗は残っていたんだよ」
「ドジョウねえ。そういえば魚屋さんの店先でドジョウが桶に一杯入っていたのを見たことがあるわ」
　店先では、錐（きり）のようなものをドジョウに刺して包丁で捌いては売っていたのです。
「子供の頃は食べたことがあったけど、最近は姿もめったに見られなくなってさ。今では高級食品だって」
「どじょっこ、ふなっこっていう歌もあったくらいだから、昔は沢山いたんでしょうねぇ」
「親父の転勤であちこち行ったけど、田舎町のほうが良かったね。せみなんかこんな手の届くところに鳴いているんだからねえ」
　都会にいると山や川など自然が恋しくなるよ、という彼の言葉に共鳴するものがありました。
「のどかだったわねぇ」
「林間学校や臨海学校なんてあったの覚えている？」
「あったあった、そんなことが」
「学校の裏山に、工作の時間に作った小さな机を担いで行ったことがあったよ」
「山の中の音っていいわよねえ、シーンとした中の葉音、セミや小鳥それと山鳩の声、街中の音と全然違うもの。そこに木漏れ日が差し込んで・・・」
「山かぁ・・・勉強そっちのけで、アケビを採ったり。拾ったドングリで釘と輪

ゴムでコマを作ったこともあったなあ」
「樹木の間にダンボール箱で自分たちの城を作ったり」
「テントで夜を過ごした時の夜空の美しさなんか最高だった」
「テントといえば、砂浜で波の音を聞きながらの星空も素敵だったわ」
「海も良かったねえ。今は波消しブロックでコンクリートだけど、ゴツゴツした岩が連なっていて、その割れ目にカニや小魚がいてさ・・・」
「自分の目の前に、手の届くところにいるんですものね。不思議だったわ、海の世界が自分と一緒になったような気がして」
「今よりずーっと、どこまでもどこまでも青々としていたものなあ」
二人は遠くを見つめるように語り合いました。

幼い頃や田舎の風景を話す夫の表情はとても可愛らしく見えました。
しかし夫の語った生まれ故郷も、今では田畑(たはた)が住宅地や商業地に変わり、国道が走り街並(まちな)みも随分都会的なたたずまいを見せているのでした。もう昔の面影は夫の瞳の中だけのものになりました。
夫は大学を出て東京都庁に入庁してからも、ずーっと東京暮らしが続いていました。結婚後、西武新宿線の郊外にマンションを購入、これを契機に夫の両親を田舎から呼び寄せて一緒に暮らしたのでした。両親は田舎を離れることに対してとても迷っていました。ハッキリ言えば絶対反対だったのです。でも長男である夫は一緒に住みたいと言い張り、結局両親は折れました。田舎には住み慣れた家はもうありません。このことが後に、鈴江おばあちゃんに影響してくるのでした。

カプセル　十一

ふたたびの
・・・・・田舎暮らしから都会に移り住んで、そしておじいちゃんが亡くなり、心のよりどころを見失ってすっかり気落ちしてしまった鈴おばあちゃん。そんな鈴おばあちゃんの健康不安から、ママは遠い昔のことが蘇りふたたび胸が痛くなるのでした。そんな我が家に可愛い家族が新しく増えました。この辺からあなた達も登場します。透君、ほんのちょっぴりでごめんね。仔犬が来てから、鈴おば

あちゃんも少しずつ元気になってきたような気がします。

世の中はコンピュータが私達の生活圏内に浸透してきました。このところ盛んに言われている「ユビキタス」の社会を迎えつつあります。誰でも何処でも簡単にコンピュータで色んなものにアクセス出来ます。様々な生活情報を入手することも実に簡単に便利になりました。これからもものすごい勢いで進歩していくことでしょう。おそらく子供の遊びの仲間にロボット君が入り込んでいくのもそう遠い時代ではないと思います。

我が杉山家は、公務員の夫と中学1年生の長男（透君あなたです）、小学校4年の長女（綾ちゃんですよ）、そして鈴江おばあちゃんの五人家族です。それと後で出てくる愛犬ポテトがいます。おじいちゃんは三年前に亡くなってしまいました。

「どうも、お義母さんの様子が心配なの」

明日美はある日、夫にこう切り出したのです。

「あのね、お義母さんがぼんやりしていて元気が無くって」

テレビも見ているようで見ていないのです。あの主人公がどうのこうのと話を振ってもストーリーを把握していないし、それに話をするのが億劫になっているようです。あまり外出もしたがらず、そうかといって、家庭内のことは、以前みたいにテキパキと処理する素振りも無いのでした。

「悪い病気だといけないから早めに先生に相談してみましょうか？」

夫も気にしていたのです。すぐにお願いしようということになりました。

斎藤先生は我が家の家庭医でした。症状をメールで報告すると、こういうことも考えられる、ここのところをもう少し経過を見ていてください、などアドバイスしてくれるのです。

早速、要点をまとめてパソコンメールで家庭医の斉藤先生に送りました。まもなく先生から返信がきました。いくつか説明が記載されていましたが、明日美は「老人性うつ症」という文字に釘付けになりました。

「そういえば・・・・・・」

明日美は幼かった頃、母から聞いてい

たことが蘇ってきました。

参考までにと斉藤先生が自分の感想を次のように纏めてくださいました。

「どんなに時代が変わっても、いや進化して便利な時代になればなるほど、人と人との触れ合いが大切になってきます。医療技術の中に、人の心の占める割合が時代とともに大きくなっています。おばあちゃんは、おじいちゃんに先立たれ、大都会の中で孤独を感じておられたのではないでしょうか。それからよくあることですが、若い世代にバトンタッチをした時に感じることで、自分はこれで社会的にも仕事を終えたのだと。つまり自分の存在意義がなくなったと思い込むことが多いのです。会社や学校で指導的な立場にあった人ほど、得てしてこういう心境になるものです。この辺がお年寄りの心の転換期になるのです。社会の中であるいはもっと身近なところで、自分の果たす役割が見えてこないと不安でやるせないものです。お年寄りは物理的に未来が短いのです。未来が短い分、過去はどんどん増えていきます。ですから昔の思い出に生きる方が多いのですね。その過去を、思い出話を聞いてくれる人が居ればいいのですが、思い出話に花を咲かせることが出来るのは、やはり同世代の人が一番です。でも同世代の人は当然ながら年々減っていきます。現実はそう上手く成り立っていません。だから今をどう充実させるかがとても大切なことなのです。難しいことでしょうが、何かおばあちゃんにやれるものを、生きがいの対象となるものを探してあげてください。そして家族みんなで進んで話し相手になってあげてください」

明日美はベランダに出て、何か遠い過去に、取り返しの出来ない忘れ物を思い出したような気持ちで、ぼんやりと佇んでいました。

夜遅く夫が帰宅しました。

早速、斉藤先生のアドバイスを伝えました。

「おやじでも生きていればなあ。こんど二人で斉藤先生のところへ行ってじかに話を聞こう」

夫はメールを目で追いながら、そう言ってくれました。

おじいちゃんは、三年前脳溢血であっという間に亡くなってしまったのです。

「今は、うつ症は治りますって先生がお

っしゃってたわ。それには家族の協力が必要なんですって」

自分で家族の協力がと口にしながら、苦い思いにかられるのでした。

「私、先生の言葉の中で〈生きがいの対象〉ということにハッとしたの。母が私の苦情を聞いても、タケばあちゃんに言わなかったこと、それにタケばあちゃんのあの当時の苦しみも・・・子供の頃、辛く当ってしまったこと、今頃になってあらためて後悔(こうかい)しているの」

「以前言っていた〈ウンコ拾い〉の頃のことだろう」

「えぇ、私、あのころ本当にいやでいやでしょうがなかった・・・」

「その原因は僕にもあったわけだ・・・人の気持ちを察するってことは難しいもんだよなあ」

「そうよ、あなたの責任、重大よ」

明日美は、目にほんの少しだけ寂しそうな笑みを浮かべながら言った。付き合っていた頃から何回か口にした「責任重大よ」との言葉が久しぶりに飛び出したのだ。

「ビールでも飲みましょうか」

珍しく明日美は自分の方から切り出し、冷蔵庫からビールとちょっとしたおつまみをテーブルに並べ

「さあ、どうぞ」

夫にお酌しながら「私もいただくわ」とグラスを手にしました。

「私、イジメられたからって母やタケばあちゃんに反抗していたけど、それだけじゃなかったんだわ。単に理由付けでしかなかったのかも・・・汚(きたな)い物、嫌(いや)な物から目をそらす、見たくないって一種の逃げだった・・・私の心の中にそういう気持ちが働いていたのよね。だからイジメが無くなってもタケばあちゃんに歩み寄ることが出来なかった」

明日美の胸から消えることのない過去が噴き出してきたのです。

「おばあちゃんは、何もしないで暮らしているのが辛かった。自分の存在がどこかで社会と繋がっている、誰かと繋がっているという充実感が欲しかった・・・それに君のことを育子ちゃんとダブらせて、少しでも力になろうと」

「そうだったのね。でもそれを知らずに随分ひどいこと言っちゃった。タケばあちゃんなんか居ない方がいいって言ったり、死んでしまえって・・・取り返しのつかない言葉を使っちゃった。私、自分のことで精一杯でおばあちゃんの気持ち

を考えようともしなかった。無関心や無視されることほど辛いことはないのよね、人って。元気なうちに心を開けなかった自分に・・・」

「・・・まあその当時は無理もなかっただろうけど。将来や未来という時間が物理的に短くなった人にどう考え対応していけばいいのか、年寄りは外での繋がりが少なくなる分、家の中での繋がりが重要になってくるんだろうなあ」

「私、母から何度も叱られた。タケばあちゃんのこと少しは考えてあげなさいって。言葉では分かるんだけど、いざとなると。タケばあちゃんと真正面(まっしょうめん)から向き合うことを避けていたのね。学生時代、星空を眺めているうちに、人間なんてちっぽけなものだなって。そんな自分が悩みに思うことなんて海岸の砂粒ひとつにも満たないことだって思えてきたの・・・不思議なものね、星空って。でも気が付いたときには、タケばあちゃんとはもう話し合おうにも話し合うことも出来ないのよ」

明日美の大きな目が酔いと相俟って潤んでいました。後戻り出来ない時の流れを痛いほどかみ締めているのでした。

「悩みをなんかのきっかけで自分なりに解決できれば幸せだけど、それが出来なくてずーっと引きずっていく人が多いからね。子供同士でも、こっちが軽い冗談やいたずらと思っても、相手には命取りの言葉に聞こえることもあるんだってことがよく分かったよ」

夫の言った言葉には、遠い昔に対する気持ちが込められていたように明日美には響(ひび)いたのでした。

透君、綾ちゃん、突然ですけど、ママが小学生の頃のガキ大将でいじめっ子の「健太」が、他県に引越しをしてからどうなったか知りたくはないですか？

パパと同じ名前の健太は、その後東京の大学に進学していました。しかもママと同じ大学、おなじサークルに。おもしろいわよ、人生のめぐり逢いって・・・あの健太が、あなた達のパパになっているなんて・・・。

星空観察会でばったり会ったら、昔のイジメっ子の影がすっかり変わっていたのでした。六年生の時以来ですから無理もないでしょうけど。最初、ママにはこだわりもありましたが、会っているうち自然とそれも遠い過去の映像になってい

きました。そしてタケばあちゃんが亡くなって落ち込んでいたとき、昔とは逆にママを力づけてくれたのです。

「私、今度は、お義母さんのこと精一杯バックアップするわ。まだ六十七歳ですもの、もっともっと元気になってもらわなければ・・・」

あくる日の夕方のことでした。

「ママ、ねぇママったら！」

娘の綾子のことばにふっと我に返りました。

「ああお帰りなさい」

「居ないのかと思ったぁ」

「ええ、ちょっと考え事をしていたものだから」

「ねぇ、お願いがあるんだけど・・・」

「なによ、あるんだったら早く言って」

「あのね、三丁目のパン屋さんのドアに張り紙があってさぁ・・・」

「それで？」

「あのね、犬飼いたいんだけど」

「えぇ！　犬を」

「そう、柴犬なんだって、生まれてから三ヶ月の仔犬だって」

「柴犬！　どうしたの」

「四匹生まれたので、誰か飼ってくれる人を探しているんだってさ」

明日美は綾子の言葉と、小学生だった自分を重ね合わせ、またまた胸が締め付けられるような思いがしました。時代が移っても、子供の犬への興味は変わらないものですね。

「そうねぇ、仔犬ねぇ」

「ね、いいでしょう？」

昔と違ってマンションでも犬猫が飼える時代なのでした。建設時の設計にペットが飼えるように工夫が施されるようになったのです。ペットが飼えるということで物件の商品価値が認められる時代です。が、明日美は綾子の駄目押しの言葉も聞こえぬかのように、ふたたびもの思いにひたっていました。

「綾子がね、犬を飼って欲しいって」

帰宅した夫を迎えるやいなや早速切り出したのです。

「犬を？」

明日美は綾子から聞いたことを話してみました。

「私、飼ってもいいかなぁって思ってるんだけど、どう？」

「君にまかせるよ、君や子供たちの方が

接する時間が多いんだものな。明日にでもちょっと話を聞いてみなよ」
「そうねえ、だけど生きものは死んじゃうことを考えると辛いという気持ちもあるのよね」
桃子の死を思い出したのです。
「なんだ、ためらっているの？　それもそうだけど、死ぬことも有るんだってこと、子供のときから経験してたほうが良いんだよ」
「じゃー決めようか。綾子も喜ぶし」
「セラピー犬にでもなれば、お袋にもいいんじゃないの」
「お義母（かあ）さんにも喜んでもらえればいいですけど。それにしても、お義母さんの病気といい、綾子の犬の話といい、不思議なものねぇ。子供の頃とそっくりになるなんて」

翌日、明日美がパン屋さんで話を聞いてみたら、柴犬系の雑種ということでした。
「残っているのは女の子なんですってよ」
奥さんはそう言いながら連絡をしてくれました。
間もなく親切にも飼い主の方が我が家まで連れてきてくれたのです。
「まぁ可愛いワンちゃん」
その姿に、またもや桃子の姿が浮かんでくるのでした。抱き上げるとクンクン鼻をならし、明日美の耳をなめようとします。仔犬独特の香りがいじらしくもあり、また懐かしくもありました。
「ほら、おばあちゃん可愛いでしょう」
鈴おばあちゃんに仔犬の顔を見せました。
「明日美さん、朝言ってた犬？　可愛いわねえ」
おばあちゃんも久しぶりに笑顔を見せてくれました。
「まあまあ、こんなあどけない顔をして。私も昔、田舎で飼ってたことがあるんだけど。それ以来ね」
鈴おばあちゃんは仔犬を抱いて嬉そうに言いました。
夕方、綾子が玄関を開けるなり、ただいまも言わず、「犬いる？」とたずねました。そして、ベランダの隅にスーパーで見つけた手ごろのダンボール箱に、入っている仔犬に駆け寄りました。
「わぁー可愛いー。ぬいぐるみみたい！」
抱っこするその仕草は、まるでままごとの人形と遊んでいるようです。

「ほらほら、そんなに揺らさないで」
鈴おばあちゃんが、抱っこして遊んでいる綾子に笑いながら注意しました。
「おばあちゃん、この仔どんな名前がいいと思う？」
「それは綾ちゃんが考えれば？」
「冷たいなあ、おばあちゃんは」
そう言いながらも、名付け親になれる嬉しさを隠そうともしません。
明日美も、鈴おばあちゃんと綾子の久しぶりの会話を耳に微笑（ほほえ）んでいました。
お兄ちゃんが部活を終えて帰ってくるなり、仔犬の泣き声がしている方へすっ飛んでいきました。
「おー、こいつか。よしよし」
思いっきり抱き上げ頬ずりしています。
「ダメよ、仔犬はね、きちんと寝かさないと」
散々自分は遊んでおきながら綾子は透に注文をつけているのです。
「このお腹、薄皮まんじゅうみたいだね」
「そんな突っついちゃダメよ」
「分かってる分かってる。名前どうするんだ？」
「私が考える」
「女の子だから、桃ちゃんはどうだ？」
透から偶然に飛び出した名前に、明日美はびっくりしてしまいました。
「ダメダメ、私が考えるってば」
「お前、ちゃんと散歩出来るのか？」
「お兄ちゃんもやってくれるんでしょう？」
「僕は勉強で忙しいから」
「あら、いつも遊んでばっかりいるくせに。私はちゃんとやるわよ」
二人の他愛のないそのやりとりが、明日美には三十年前の自分とダブルのでした。
やがて子犬の名前が決まりました。
「ポテト」です。パン屋さんのメニューがヒントでした。
ポテトはたちまち我が家の大スターになりました。

「ポテト」が来てから、鈴おばあちゃんも少しずつ元気を取り戻してきたように見えました。我が家は随分にぎやかになりました。斉藤先生には定期的に相談を持ちかけ指導を受けています。家庭医制度には本当に救われる思いがします。先生が親身になって相談に乗ってくださるからです。昔から「産業医」制度が企業の安全衛生に指導的役割を果たしてきま

したが、家庭医制度が今後益々重要視され定着していくことを願っています。

カプセル　十二

虹のごとし

・・・・・ いよいよカプセル便も最終便になりました。これはママとパパが付き合っていた頃、パパが自分の子供の頃の思い出話しをしてくれたの。その話はホンワカしていて楽しかった。それを詩に綴(つづ)ってみました。十年後、あなた達の瞳(ひとみ)には、どんな虹が残っているのかしら？

明日美も気持ちにゆとりが出てきたこともあり、夫から以前聞かされていた、子供の頃の思い出をヒントにパソコンに向かっていました。

「なんだい？　そんなに真剣な顔をして」

「タイムカプセル便よ。子供たちの分は、日中書き終えてるんだけど」

「フーン」

「これは、あなたとの思い出話をヒントにね、感じたままのことを書いてるの」

「タイムカプセル便ねえ、と言うことは今は見れないってことかい？」

「そう、今はダメ。綾子が学校から明日の七夕の笹竹を持ってきたけど、これは十年後の七夕までおあずけよ。十年後、あの子たちのものと一緒に楽しみに待っててね。そのときは、みんなでお祝いしようよ」

〈　虹のごとし・・・　あなたへ　〉

〃時〃の秒針は
とどまるを知らず正確に刻み行き
過去を積み重ねて、今を形作っている

〃思い出〃とは
未来と過去を支える現在という支点が
過去に寄ったとき
そこに現れてくる映像であり
未来に寄るとそれは
〃夢〃となる

現在地点に立ったとき
視線を過去に向けているのか
未来に向けているのかによって

自分の生き方が変わってくる

年代・年齢層によって
過去と未来のバランス感覚は異なるが
たまには、虹のごとし過去を
訪ねてみるのもいいものだ

人は心や身体に何かが触れたとき
無意識のうちに
突然、脈絡の無い断片的な情景が
瞬間的に浮かぶことがある

潜在的に、人それぞれ
美しく懐かしい心の原風景・ふるさと
があり
それは、いつまでも不変でありたいと
願っているからだと思う

思い出と夢のかけはし
それは永遠に消えることのない
〃虹〃なのかも知れない

ふるさとに　山あり
ふるさとに　河あり
そして　なつかしき　人あり
いま　ふるさとは　我が瞳にあり

ふるさとは　忘れがたし

ひと仕事やり終えたときの心地よい疲
労感と共に、あらためて家族の絆と温も
りを感じるのでした。
二〇〇X年七月六日　ささやかながら
も幸せに満ちた夜が過ぎてゆきます。

……

終章
七夕の日に

今日、二〇十X年　七夕の日。
商店街は今年も七夕の飾りで賑わって
いる。
カラッと晴れわたった日曜日のお昼前
のことだった。
エンジン音が弱まり車の停まる気配が
した。一呼吸おいて玄関のチャイムが鳴
った。。
透が玄関に出てみると、郵便局の人が
分厚い大判の封筒を差し出した。
「杉山透さん、綾子さんはこちらでよろ
しいでしょうか？」

「はい、そうです」
「タイムカプセル便です。はんこをお願いします」
受け取った封筒の右下に「タイムカプセル便」の青いシールが目についた。あて先は、「杉山透様　綾子様」とある。
「どこからだろう？」
差出人欄を見た透は、慌てて履いていたサンダルごとフロアに上がってしまった。
「綾子、綾子！」
うわずった大きな声で綾子を呼んだ。
「母さんからだ！」
差出人欄には、杉山明日美と記されていたのだ。
依頼日が、二〇〇X年七月七日。
配達指定日が、今日、二〇十X年七月七日とあった。
ちょうど十年前に郵便局に差し出したものだ。
「ママからって・・・なんのこと？」
昼食の準備の手を休めキッチンから出てきた綾子。
「母さんからのタイムカプセル便」
「ええっ！　ママから？　なんで、なんで？」
綾子は驚き、目をまん丸にして透が持ってきた封筒を凝視した。
「綾子、中身お前知ってるか？」
「知ってるわけないじゃない。それよりお兄ちゃんは何か聞いてないの？」
「全然だよ」
「十年前ねえ、十年前の今日か」
綾子の差し出したハサミが震えている。
透は興奮しながら封を開けた。
「父さんは知っているのかなあ」
お昼までには戻るから昼飯の用意頼むよ、と家を出た父は、鈴おばあちゃんの居る介護ステーションに迎えに行ってまだ帰っていない。足を痛めたおばあちゃんは介護施設でリハビリを行っている。ただ毎週日曜日には自宅で過ごすことになっているのだった。
封を開けると、郵便局からのメッセージが添えられていた。
「タイムカプセル便付き定期貯金　十年ダイヤモンドコース」
目出度く満期となりました。
ここにタイムカプセル便を添えてお知らせ申し上げます。
ご愛顧いただきまして誠に有難うございました。

一緒に二通の封書が出てきた。しっかりと閉じられた封を開けるもどかしさが指に伝わってくる。

ひとつの封筒には、当時の二人の写真や作文・図画・習字などの作品が入っており、それに家族全員の集合写真も出てきたのである。その一つひとつを手にするたびに歓声を上げながらすっかり十年前の二人になっていた。

もうひとつの封筒には、表紙に「消えない虹」というタイトルが付された文書のようであった。ページをめくると、そこに母・明日美の想いが綴られていたのだった。

「ママにも教えてくるね！」

綾子が立ち上がると、透が大急ぎで重ねた郵便物を携え後に続いた。

「ママ、ほら、タイムカプセル便。覚えてる？」

綾子は、透が畳の上に置いた封筒を明日美に見せた。

「まあ、懐かしいわねえ・・・。忘れてなんかいないわ」

「母さんがタイムカプセル便に依頼していたなんて、僕は全然覚えてないぜ」

「びっくりした？」

「ああ、でも面白いもんだね。過去と現在が一気に縮まった感じだよ。あの当時住んでいたマンションでの生活も久しぶりに思い出してしまった」

同じ市街地の戸建てに転居してから五年が過ぎていた。

「ママがこんな子供時代を過ごしていたのかと思うと・・・」

綾子が、幾つかに別れたタイムカプセル便を広げながら明日美に語りかけた。

「綾ちゃん、鈴おばあちゃんのこと頼むわね」

「そういえばパパたち、もうそろそろ戻ってくると思うけど」

「そうねえ」

透と綾子は、広げたタイムカプセル便に夢中になっていた。

そんな姿を明日美は、ただ黙ってにこやかに見つめているのだった。

「あっ、パパたち来たわ」

車のドアの閉まる音が聞こえ、綾子は足早に玄関に向かった。

「鈴おばあちゃん、お帰り」

上気した顔で迎える綾子。

「どうした？」

父が怪訝そうな顔で訊ねた。

「ママからタイムカプセル便が届いた

の」
「ママから？」
父が鈴おばあちゃんを支えながら奥の部屋に向かった。
「タイムカプセル便だって？　透」
「そうなんだ、父さん知ってた？」
鈴おばあちゃんを椅子に腰掛けさせ、透が差し出した封筒に父の目が止まった。色んなものを見比べたり、考えるような仕草をしながら家族みんなが写ったスナップ写真に目を注いだ。そして、もう一度封筒を手にした。
「依頼日が二〇〇X年七月七日ということは、母さんの亡くなった日だぞ」
透と鈴おばあちゃんに向かって言った。
「母さんの亡くなった日だ」
お茶の用意をしている綾子にもそう声をかけた。
「そうなのよねえ」
と言いながら戻ってきた綾子も、父の指した依頼日を食い入るような眼差しで追っていた。
「明日美さんから・・・」
鈴おばあちゃんは、そうつぶやくように言って仏壇の遺影を見やった。
しばしの沈黙が十年前の母の像を徐々に鮮やかに引き出していることを窺わせた。傍らで老いたポテトが綾子に寄り添っている。
母が事故に遭ったのは、郵便局からの帰り道と言われていたから、このタイムカプセル便はその日のものだったに違いない。
「この中にも書いてあったけど、そういえば何となくママが話していたような気がしてきたわ」
十年後に、今日の七夕の日に、今、目の前にある「タイムカプセル便」を広げながら、家族揃っての夕餉の語らいを楽しみにしていたのでしょうに。
十年前の悲しみも、今では冷静に受け止められるようになったものの、それでも・・・あの日、あの時のことさえ無ければ・・・と。

前日書き上げたこのタイムカプセル便。おそらくこの封筒を大事そうに抱え郵便局に向かったことだろう。
事故はその帰り道に起こった。明日美の前を歩いていた五歳くらいの女の子が手にしていた風船が舞い上がったのだ。その子の母親がショーウインドウに目を向けた瞬間のことだった。歩道から路上へフワフワと飛んでゆく風船に、女の子

は慌てて道路に飛び出した。そこに一台のトラックが近づいてきた。明日美は思わず我を忘れ女の子のもとへ走った。そして身体を抱き寄せ歩道の方に押しのけた。女の子は幸いかすり傷程度で済んだものの、明日美は逃げ遅れてしまった。救急車で運ばれはしたが、打ち所が悪く、間もなくその病院で息を引き取ったという。まだ三十八歳の若さだった。透が中学一年、綾子が小学四年の時のことである。

「ママは、私たちがタイムカプセル便を読み終える場面まで描いていたのね」

　そこには、次のような文章が記されていた。それは、ささやかながらも幸せに包まれるひと時を待つ母・明日美の願いでもあった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・

今日は二〇十X年の七夕の日です。

透君、綾ちゃん、ご機嫌はいかがですか？

随分長くて見るのに大変だったでしょうが、ママがタイムカプセル便に出しておいたものです。

透君いや透先生、新米先生頑張ってよ。

綾ちゃん、二十歳おめでとう。あなたも人生の新たなスタートの時を迎えましたね。

二人それぞれの人生の起点に、ママは「タイムカプセル便」の照準を合わせたのよ。

さぁ、早くこっちへ来て。ポテトもよ。

今夜はみんなでゆっくり語り合いましょう。

お酒もチョッピリ飲みながらね。

パパにも、今日は他に予定を入れないようにって、しっかり言っておきましたから、間もなく帰って来るでしょう。

さあ！　おばあちゃんも

〃七十七歳、喜寿（きじゅ）おめでとう〃

・・・・・・・・・・・・・・・・

　喜寿おめでとうのことばに、鈴おばあちゃんはそっと瞼に手をあてている。

「母さんも今日を楽しみに待っていたんだよな。みんなと一緒になって、こうして驚いたり笑ったりするのを。それに僕ら二人がどんな大人になっているかって・・・」

　封筒を手に仏間の遺影に透が語りかけた。

「そうよねえ。ママの想いを一所懸命に伝えようとしていたんだもの。それに思い出にも色んな思い出があるけれど、辛い思い出も分かち合えば少しは和らぐのよね。やっと、辛いという文字が消えて思い出だけになれた・・・タイムカプセル便がその締めくくりでもあった・・・本当なら、ここにお昼の準備をしているママがいるんだよね。綾ちゃんも手伝ってとかなんとか言いながら」

「母さんの辛い想い出と同じようなことを、僕らに踏ませたくなかったんだよな、きっと」

「星空をながめているママの姿が見えるようだわ」

「僕は母さんとの約束の先生にはならないで、サラリーマンになっちゃったよ。けど母さんと少しは関係してる仕事かもな。昨日も徹夜さ」

「お兄ちゃんはね、宇宙科学の研究所に就職したのよ」

「星空観察会のようなもんだよ。母さんの影響かな」

「お父さんもでしょ」

写真の明日美がそう言い足したような顔に見えた。

「私は、大学の教育課程に進んだの」

綾子は大学二年生になっていた。

「ママの小学校時代を知って、益々先生になりたいって思っちゃった。ちょうど今授業で「母」という題で作文を書いてるの。教育の始点だもの、母子関係は。それからね、ママが助けた女の子も、もう高校生一年生。お家は引っ越しちゃったけど、今年も、お花が届いているのよ」

三十八歳のままの明日美は笑顔で二人の話を聴いているようだった。

「母さんはまるで自分が居なくなるのを知っていたみたい。僕らに色んな夢を託してね」

「そうねえ。私たちの胸の中に、笹竹と短冊を一杯飾って」

透と綾子はもう一度仏壇の遺影を見つめた。

「母さん・・・」

「ママ、ほらよく見て、ママのタイムカプセル便。私たちの宝物よ」

「透君、綾ちゃん、喜んでもらえたかしら？　これからも元気でね」

にこやかな顔とともに、明るく元気な声が聞こえてきた。

二人の会話を聞きながら、父・健太の胸に数々のシーンが蘇った。

「明日美、ありがとう」

十年ぶりの再会。
あの日の別れは、「また逢う日の始め」
でもあった。

なぜでしょう？
記念に埋めたタイムカプセル
掘り起こしてみたら
それは光り輝くダイヤモンドになって
いた

明日美の想いは、十年という時の研磨
剤によって今ダイヤモンドの輝きを伴い
届けられたのだ。
〃思い出と夢のかけはし
人は、それぞれ永遠に消えることの
ない
虹を抱いている〃

別れはまた逢う日の始め・・・再会シリーズ
第５話　　終わり